783

特200
171

天壤無窮の御神勅
神武東征の御戰略

始

特200
171

天壤無窮の御神勅
神武東征の御戰略

附 谷川士清先生小傳

伊藤太郎謹著

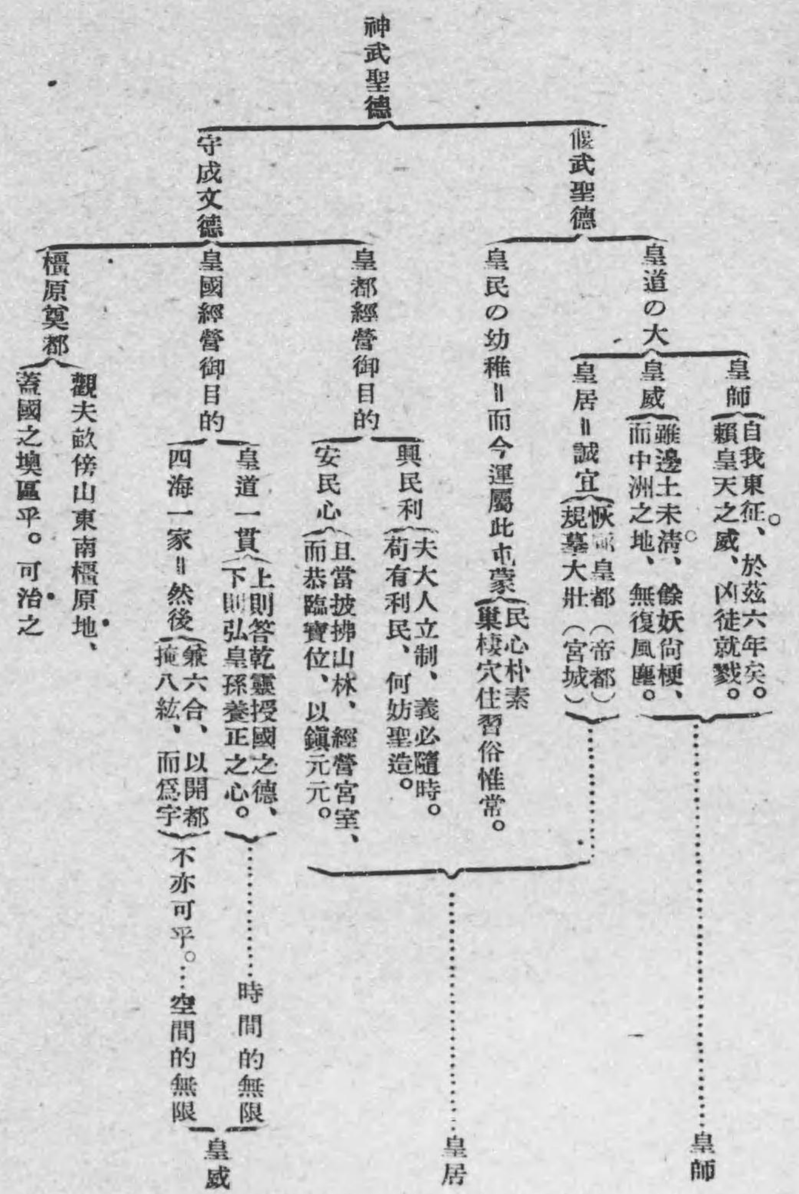
昭和代 帝國文庫

神武天皇橿原奠都の詔

我東を征ちしより、茲に六年になりぬ、皇天の威を賴りて凶徒戮されぬ。邊土未だ清まらず、餘の妖尙ほ梗たりと雖も、中つ洲の地復た風塵なし。

誠に宜しく皇都を恢め廓き、大壯を規り摹るべし。而るに今、運此の屯く蒙きに屬ひ、民の心朴素にして巢に棲み穴に住む習俗惟れ常となれり。夫れ大人の制を立つる、義必ず時に隨ふ。苟も民に利あらば、何ぞ聖の造に妨はむ。且當に山林を披き拂ひ、宮室を經營りて、恭みて寶位に臨み、以て元元を鎭むべし。

上は則ち乾靈の國を授けたまひし德に答へ、下は則ち皇孫の正しきを養ひたまひし心を弘めむ。然して後に六合を兼ねて、以て都を開き、八紘を掩ひて宇とせむこと、亦可からずや。夫の畝傍山の東南橿原の地を觀れば、蓋し國の奧區か。治るべし。



梗概

一、神勅　大御言葉としては天照大神が仰せられました。然し天照大神の御德のあらはれとしての大御言葉であります。

のみならず、いざなぎ、いざなみ二神の御德のあらはれであります。

のみならず、代々の神樣の御德のあらはれであります。

のみならず、神話の最初の神樣の御德のあらはれであります。

のみならず、日本語の發生と同時に神勅奉戴の精神が活躍してゐます。

のみならず、代々の天皇の御德のあらはれであります。（十九頁）

一、敵前上陸　拂曉戰　地物利用　佯攻　敵情偵察必勝の信念、陛下の軍人といふ信念等みな〳〵神武天皇樣に始まつてゐます。

目次

天壤無窮の神勅八紘一宇の詔勅

○歷史的謹考

一、天壤無窮八紘一宇の皇道は神代史の始から輝いてゐます……一
二、代々の神樣の御德の表現(アラハレ)であります……三
三、いざなぎ、いざなみ二神の御德の表現であります……四
四、天照大神樣の御德の表現としての大御言であります……八
五、木花咲耶姫の坤德……九
六、天孫降臨の現代的意義……一一
七、天孫降臨と其の御準備……一二
イ　精忠三代の出雲の神
ロ　精忠六代高產靈の神
ハ　精忠四代猿田大神
ニ　武甕雷四代の忠勇、經津主三代の忠勇
八、御降臨供奉の神々……一六
祭政一致—祭文一致—祭戰一致—科學日本、產業日本の魁

○語源的研究

——日本語發生の當時から天壤無窮の神勅扶翼の精神に燃えてゐました。——

一、皇國日本……二〇
二、親子の日本……二六
三、氏の日本……三〇
四、まことの日本……三一
五、まつりの日本……三三
附　新年季題に見えたるまつりの日本……三七

○天壤無窮の神勅の意義

一、神の御言葉のひゞき（天皇即國家、天皇即大父母、天皇即天地）……四二
二、やたの鏡の日本（智慧世界一）……四五
三、まが玉の日本（なさけ世界一）……四九
四、むら雲の劍の日本（勇氣世界一）……五二
五、葦原の日本（海國日本）……五五
六、瑞穗の日本（產業日本）……五七

神武天皇御東征の御戰略

一、長期戰の御準備……六一
二、連絡綏撫しつゝの御進軍……六四
三、佯攻と本攻とは神武天皇樣に始まる……六五
四、敵前上陸は神武天皇樣に始まる……六六
五、拂曉戰は神武天皇樣に始まる……六七
六、地物の利用は神武天皇樣に始まる……六八
七、「楯祭」の神事と「奉り」の語源……六九
八、七生報國の信念は皇兄五瀨命に始まる……七〇
九、護國の鰐……七一
十、熊野迂回の大戰略……七二
十一、必勝の信念は神武天皇樣に始まる……七三
十二、神武天皇樣の敵情偵察……七五
十三、「汝の敵を愛せよ」の御實行……七五
十四、大敵を怖れず小敵を侮らざる御諭し……七七
十五、陛下の軍人＝陛下の赤子……七七
十六、散開と密集（寡を以て衆を包圍擊滅）……七九
十七、敵の戰略の裏をかく……七九
十八、金色の鵄の戰略的意義……八〇
十九、細戈千足國の名稱……八二
二十、戰後の御經營……八二
二十一、むすび……八三

附　谷川士清先生小傳

一、家風と感化……八五
二、遊學……八六
三、歸鄕……八八
四、開業と恩師追慕……八八
五、日本書紀通證と倭訓栞……八九
六、其の他の著書……九一
七、疑問の屋敷……九二
八、賴氏と唐崎氏……九三
九、反古塚……九三
十、日本魂……九五
十一、疑問の死……九六

――八紘一宇の言靈（ことたま）――

◎やすみしゝ　我が大君の（推古天皇　持統天皇の御製に見ゆ）

やすみしゝ　とは、安らかに治め給ふ意と、大言海、國語辭典、言泉等は說けども、谷川士清先生は、「やすみしる」といふ語と共に、八方の隅までしろしめす意と解せり（倭訓栞による）。此の意を推せば八紘一宇の中心たる皇室の意となる。

◎そらみつ大和（元正天皇　孝謙天皇の御製に見ゆ）

山、空にみちて聳ゆる大和の意に解するが普通なれど、みいつの空にみつる大和（乃至日本）と解する谷川先生の說に從ひたい。即ち八紘一宇の日本といふ言靈が動いてある。

◎北條時家の、蒙古擊碎の祈禱文に、國民一躰となり、佛敎儒敎共に皇道を擁護して八紘を照すべきを祈りて曰く、

同從二皇圖一、共遵二聖業一、　佛日舜日齊照二於八紘一。
慈風、堯風、並行二於四海一。

天壤無窮・八紘一宇

歷史的考察

【一】神代史の始から輝いてゐます

ナチスは世界大戰後に於ける極衰ドイツを蘇生せしめ復興せしめ、ファッショは共產地獄のイタリヤを救命し雄飛せしめました。而して御神勅は夙に皇國を產み橿原奠都を產み、明治維新を產み今や將に興亞維新を產み給はむとしてゐます。實に榮ゆく時の感恩譜として苦しむ時の不撓曲として、皇國無限の生命力、原動力、發展力、創造力之より滾々として湧き出るのであります。

抑〻神勅は成文としては天照大神が天孫に降し給うたのでありますが、靜かに考へますと、神武天皇の八紘一宇の勅語と共に日本歷史の第一頁から輝きに輝き、日本語誕生の第一聲から無敵の力を以て芽生え、日本語の成育と共に成育して來たのであります。

先づ史上から拜察申しますと、天御中主と申す神樣が、天地の未だ剖れなかつた時に出で給うたのであります。天地の未だ剖れなかつた時でありますから天御中主と申し上げても地を兼ねてゐられます。天地の主として八紘の中心として現はれ給うたのであります。實にわが皇室は「一切國王の大宗」(本家)であります。斯くの如く八紘一宇と云ふ神武の皇謨、萬代に垂れ給うた日本の世界的使命は、其の御精神たるや既に神代史の發端に輝やいてゐたのであります。よもの國皆はらからとならむ後おやと仰がむ國はこのくに

(1) 日本書紀通證卷二

(2) 大正五年選歌、片山菅雄

〳〵たのは國常立神と申し上げ、國の常に立つ意で天壤無窮の意義が儼然として存在してゐます。國常立神を一に國底立神と申し上げますのは將來に無窮なるのみでなく過去にも無窮であつた事を示し給うたのであります。すべて上代は生れた時には名無く、其の特性善惡に從つて自然に名が附けられたので、功業多ければ名も亦多く特色無ければ名も無かつたのであります、

(1) 日本書紀通證卷二に繰り返して說いてゐます。

(2) 大國主神は餘りに名が多いので大名持神(おほなもち)とも申しました

【二】 代々の神樣の御德の表現であります

國常立神と天御中主神との次に出でられました國幸槌神・國幸立神・豐國野神・泥土神・沙土神等の神名を拜誦致しましても、如何に代々の神樣が國常立神の天業を紹述するのに御躬を以て勤しみ給うたかゞ拜せられます。

大戸路神は陸上の交通、大苫邊神は海上の航路をお開きになりましたのは八紘一宇への御盡力を物語つてゐます。天御中主神の天業の御繼承であります。

次に面足神の自彊息まざる乾德を外に仰ぎ奉るの時、惶根神の猛省自警の坤德を內に慕ひ奉るのであります。發展と反省と相待つて皇威國運は次第に輝きます。面足神の遠心力的御活動と惶根神の求心力的御活動とは不可離性のものであります。此の二つの力の調和がとれて物體は存在するのであります。而して面足神の遠心的雄圖は八紘一宇への開拓であり、惶根神の求心的基礎工作は天壤無窮の神道皇道であります。

【三】 いざなぎ・いざなみの神の御德の表現(アラハレ)であります

さて次に國常立神は、いざなぎ・いざなみの二柱の神に詔して曰く

「豐葦原の千五百秋の瑞穗の國あり。爾往(いまし)いてしらすべし」と。

二神(ふたはしらのかみ)はそこで天の瓊矛(ぬほこ)を持つて天の浮橋にお立ちになりました。天の瓊矛は三種の神器の祖であります。天の明に澄むでゐるのは鏡に譬へて智、瓊(玉)の溫は仁、矛は勇であります。知仁勇を以て天の浮橋に立ち給うたのであります。(北畠親房『玄々集』。谷川士清『日本書紀通證』。井澤長秀『神道天瓊矛記』)

然らば天の浮橋とは何かと申しますと、浮くとは(1)永く懸つて墜ちない意で、無窮の實證であります。(2)橋とは通ぜざるを渡すもので八紘への行進であります。つまり二神は知仁勇の三達德を以て天壤無窮八紘一宇の神位(皇位)の上にお立ちになられたのであります。(1) 通証二 (2) 一條兼良

そこで二神はおのころじまに天降つて八尋殿(やひろどの)を營み、天の御柱をお建てになりました。自凝島(おのころじま)とは、自ら凝り固まつた島の意で、人爲の國で無く自

然的に出來た國、天成の國神造の國であります。神のかためし大和島根であります。天の御柱は宇宙主宰の柱即ち八紘一宇の中心樞軸であり、同時に國の御柱即ち天壤無窮の皇柱(みはしら)であります。

それから產みの神業を遊ばされました。

先づ國產(うま)み。淡路(あはぢ)を胎衣として大八洲をお產みになりました。あはぢとは吾恥(あはぢ)であります。惡を行ふを恥ぢるは勿論、善を行はないのを恥ぢると云ふ廉恥の積極的意義によつて大八洲は產まれに產れました。廉恥の日本は生まれたのであります。廉恥を重んずる皇國は弓の形をして世界最大の大陸と世界最大の大洋とを腹背にして形造られました。(1)通證二

此の國に育くまれた國民は弓の如く彈力性に富まねばなりませぬ。弓道は

(1) 鐵盾を貫いたり (2) 船腹を貫いたりした武勇譚に富むでゐます。又、弓の製作もアイヌや支那の倍の大ささで　世界の長所を總合した形であります。正倉院に寶藏する支化絢爛時代の弓でも八尺を越えてゐるのがあります。今日の日本も日本魂は勿論の事科學兵器も世界無比でなければなりま

せぬ。(1) 武内宿禰 (2)源爲朝、本間孫四郎

又武術技能も無比でなければ精神も武器も、十分に長所を發揮する事が出來ませぬ。柔道や薙刀も支那では兒戯に類するものでありましたが、我が國に入つて大いに發達したのであります。日本魂と日本武器と日本武術との三つが無雙でなければなりませぬ。

さて愈〻神樣をお產みになります。先づ海の神と川の神とをお產みになりましたのは、日本が海國たることのお諭しで、神勅の第一句葦原のといふ大御言葉を實踐躬行を以てお示しになつたのであります。

次に山の神〻をお產みになりました。之は日本は山の如く動き無き日出度き國の意で、神勅の第二句「千五百秋」の賀詞であります。

次に草木水火の神〻の御出產は神勅の第三句「瑞穗の國」の建設であります。

それから海國日本・山國日本・產業日本を知ろしめす御光天照大神月讀神素戔嗚の神を檍ケ原の「中つ瀨」に立ち給うて、御禊によつてお產み下さ

いました。いざなぎ神は中つ瀬に立つて三神をお產み下さいました。いざなぎ神は「中つ瀬」に立つて三神等を產み給ひ、儒敎は「中庸」に於て哲學的組織を得、佛敎は「中道」を說いて眞理の光を攫(つか)みました。實行は日本、哲學は支那、宗敎は印度。相提携して進まむかな。

次に「天照大神は高天原を、月讀神は海原を、素戔嗚神は葦原を知ろしめすべし」。

と云ふ神勅を降し給うたのであります。謹しむで按ずるに、貴き八紘一宇の系統的詔勅であります。空海陸の三方面への大進軍であります。更に之を語源から考へてみますと、空飛ぶはね（羽）と地上をはねる（跳）のと海行くふね（船）とは語調同じく、祖神が天翔る意氣もて精忠直進し、海を見ること平地の如くであつた海國男兒としての豪勁を追慕致さねばなりません。無敵空軍・無敵陸軍・無敵海軍の底力の極めて悠久なるに血湧き肉躍るのであります。

八紘一宇系統的意義

天＝高天原（天照大神）――はね（羽）＝無敵空軍
地＝豊葦原（素戔嗚神）――はぬ（跳）＝無敵陸軍
海＝滄海原（月讀神）――ふね（舟）＝無敵海軍

現代的意義

【四】 天照大神の御德の自然の表現としての大御言であります

皇國は日の神の國であります。歴代の天皇は天つ日嗣として日の神の大御業を繼承して日の本をしろしめすのであります。

天照らす大神は即ち天照す大君として天照る大御國を皇孫瓊々杵尊に授け給うたのであります。天照る光は永久に變る時なく天壤無窮であります。天照る光は照らさぬ隈無く八紘一宇であります。此の二大使命を御名に負ひ給ふ大神は御孫天津彦國光彦火瓊々杵尊に神勅を降し給うたのであります。

國常立神と天御中主神とに始まり、イザナギ・イザナミの神によつて

恢弘せられました天業は準備完了し時機圓熟して世界の光たる日の本の神勅は渙發せられました。

天津彦とは八紘一宇、國光彦とは、天壤無窮、火の明は鏡、瓊の美は玉、杵の堅は劍の勇に比して仰ぎ奉るのであります。（通證六）

時間的無限の天壤無窮と、空間的無限の八紘一宇との二大使命を輝かし給へる天照大神は、此の昭々たる二大使命と、三神器の示し給ふ知仁勇の教を最もよく御躬に體得し給へる天孫に神勅をお降しになつたのであります。

【五】 木花咲耶姫の坤德

又、謹しんで按ずるに、天孫の皇后木花咲耶姫は實に知仁勇を兼備して内助を全うせられました。「手玉もゆらに機織る女」として淑德良知ましまし、「汝を后とせむ、如何」との叡問に「私は姉の磐長姫があります。どうぞ父にお問ひ下さい」と謙讓な答をなさいましたのは仁德であります。入内一夜を經て御出産と云ふので天孫は御怪しみになりました。すると

「もし天孫の御子で無ないらば燒死をさせて下さい」と天つ神に誓を立て、猛火炎々たる產屋の中で三子を誕生遊ばされました。（或は四子とも申します）。三子共に生まれてすぐ歩き、國の柱家の柱たるべき獨語をなさいました。釋尊が生れてすぐ歩み天上天下唯我獨尊と宣べられたのと好對照であり、お釋迦樣を三人もお生になつた樣な坤德を木花咲耶姫に於て仰ぎ奉るのであります。此の火宅の中の御出產は至誠の凝り固まつた大勇であります。

省みるに孔孟は知仁勇の敎訓を繰返して述べ、釋迦は智慧慈悲勇猛を三德と稱し、貪瞋痴を三惡だと戒めました。痴は無智、瞋は無慈悲、貪は無節操であります。

日本に有史以來一貫した事實があり、支那印度にはそのことばがあり、二聖明訓を垂れて人心を淨化致しました。日本が過去に和魂漢才と和魂佛才とを以て皇運を扶翼し、將來に於て日の出の國は日沒の國と月の國とを皇化する宿緣使命の不拔である事を知り樂しみ勇み立たねばなりません。

日本は扶桑日の出の國、支那は虞淵日沒の國。（通證一、國統）いんどは音で月の意。神聖視せられてゐるいんどす河は月河の意。いんどす河、一にがんが河と云ふは恒河の意。熱き印度では月光の如く涼しく靜かな明君の政治が恒久なるを希つてゐます。（倭訓栞による）

【六】 天孫降臨の現代的意義

天孫はいよ〳〵御降臨になります。八百萬の神々は競つて忠勤を擢んでました。最初は天照大神が御子天忍穗耳尊を天降し給はうと致されましたが、時機尚早で御延期になり、準備に準備を重ねてゐられる間に瓊々杵尊がお產まれになつて御成人まし〳〵たのであります。

螢火（ほたるびな）如す輝く神（凶威を以て日の光を妨ぐ）

蒼蠅（さばへな）如す神（宣傳流言の巧なる賊）

草木磐根のもの云ふもの（國論統一に害ある言論）

いなしこめきのくに（何でも逆ふ風俗）

でありました。實に鬪爭の世相が伺はれます。然るに大御光に螢火神は消え、大御言に蠅言蜚語は止み、大御惠に草木も靡き、大祓に醜（しこ）めきものは

潔められました。

眼を世界に轉ずれば、螢火の如きイギリス、さばへなすアメリカ、草木もの言ふ匪賊の群、しこめき振舞のソビエート、忍耐と猛氣とを調整して祓はねばなりませぬ。此れ八紘一宇の天業の第一歩であります。おゝすめらみかみ、すめらみこと、すめらみくに、すめらあじあ。

【七】 天孫御降臨と其の御準備

然れども光は順境より生るゝものではありませぬ。長き光は短かき努力より發するものではありませぬ。

御降臨を輔翼し奉つた八百萬神は、二代の精忠の如きは普通の事で、四代五代と精誠純忠で一貫せられました文武の功神が多々散見してゐられます。實に御降臨は夙に遠くイザナギ神の國土をお產みなさいました時から計畫的に進められて來たのであります。

大國主神の版籍奉還は、素戔嗚神から傳へられた精神であります。素戔嗚神が高天原から放逐せられて出雲に漂浪せられても高天原の嚴罰を恨まぬ

のみならず、東へ〳〵と發展する天孫民族の危急、脚摩乳・手摩乳が八股大蛇（アイヌ）から受けてゐる苦戰をお救ひになり、命がけの激戰の後に獲られた天叢雲劍を高天原に献上せられました。此の報國の丹心は大國主神に傳へ、大國主神が其の子八重事代主神の絶對的贊成を得て（1）一君の馬前は勿論、國の隅々（百不足八十隈路）にまでも英魂義魄を留めて皇運をお守り申します」と奉答し、自分の持つてゐた天下一品の大きい八尋矛を奉り「これで惡者を亡ぼして下さい」と申し上げ、又部下の第一の猛將（嚮導神）を案内役として奉り、此の神に先鋒を一任して下さいますと必勝に決つてゐます」と、誠の溢れた版籍奉還を行つて永く神道の典型を垂れられました。實に三代精忠であります。そして此の皇民皇土の大精神は、大化の改新となり、德川慶喜の奉還となり、今なほ脈々として國民の血潮となつて流れてゐます。

（1）乃ち國平けし時に杖けりし廣矛を以て二神に授けて曰く「吾はこの矛を以て卒に治功あり。天孫もし此の矛を以て國を治め給はゞ平安ましまさむ。今われまさに百不足八十隈路に隱れなむ」（日

本書紀）

造化三神の御一人として高皇産靈神は天御中主神を輔翼ばされ、以來代々同名を襲用して高節を相傳へ以て天照大神の時に及び、御子思兼神は智囊を絞つて天岩窟の異變に雞を鳴かしめ釧女命を舞はしめられました。末子少彦名神は大國主神と兄弟のやうに仲良くして大業を輔け、功成るや蹤を晦ましました。功成りて居らず、皎潔なり崇高なり神の御業。神脚の向ふ所は朝鮮か將た滿蒙か。

嫡子天忍日命は瓊々杵尊の天降りに武功を顯はして大伴氏の祖となり、其の弟太玉命は祭器を掌つて忌部氏の祖となり、御孫天津彦日子咋神は彦火火出見尊に忠誠を捧げ、曾孫天津日神は鵜草葺不合神を、玄孫日臣命は神武東征に猛將として殊勳かくれなく、道臣命の名を賜はりました。省みるに天御中主神の佐命の神たりし以來、六代の精忠團々として神代史を終始してゐられますのは、臣道の無窮を示されたものであります。我等は誓つて此の精忠に倣はねばなりませぬ。われも亦高產靈の後なれば其の中程は

兎にも角にも。」

みちびきの神は、其の祖がイザナギ神に從つて平阪に於て黄泉軍を擊退せられました千引石即塞の神であり、武甕雷神のために　嚮導を爲し、天孫の御降臨に當りましては猿田彦と名乗つて現はれ給ひ、天孫を日向の高千穂に御案内申して置いて、更に餘鋭を鼓して東方千里に山を越え海を渡り、進みに進み、伊勢の狹田（宇治山田）に來つて農政に盡力なさいました。天照大神の「天つ狹長田」といふ模範田を葦原に於て眞似られましたから、其の御住居の地をも「狹田の長田」と申しました。御降臨のみちびきだけでも絶代の功績でありますのに、當時誰しも考へ及ばない伊勢までお進みになつたのであります。

降臨前驅の勇と東方經略の識と農政の仁とは今日滿蒙開拓の勇士の範とすべき御活躍であります。交通皆無と云ふべき時代に斯くまでも東進して、神宮御鎭座の準備を子孫にお傳へ遊ばされてゐたのであります。乃ち崇神天皇の御時に猿田彦の御子孫の太田命は倭姫命をお迎へ申して現在の御鎭座の地を御案内申しました。又御一族の塩土翁は神武東征の參謀として

「東方に美地あり青山四周して」と献策申し上げました。あゝ精忠四代猿田の神。

原田孫七郎は南洋に往來して豊臣秀吉に南洋經略を志さしめ、田中勝介はメキシコに渡り、助左ヱ門のルソンに於ける、松本や荒木の安南に王侯の富を凌ぎし事や、山田長政・濱田彌兵衛・天竺徳兵衛等の落々たる雄心も、空しく一代に終つたのは殘念でありました。今後は猿田彦精神を復活して世々厥の美を濟さねば興亞の天業は心細いのであります。

武甕雷神は稜威雄走神・甕速日神・熯速日神の後を承けて四代の忠勇を發揚せられました。經津主神は磐裂根裂神の勇猛・磐筒男・磐筒女神の謹直を繼いで三代の忠烈を轟かされました。

【八】御降臨供奉の神々

御降臨の從神には、內政輔佐に興台產靈神の後を嗣いで天兒屋命が在し、太玉命は之を祐けて祭政一致に勵まれました。

文化神として天糠戸神・石凝姥神は神鏡を造り、玉屋命・豊玉彦・櫛明

玉命は相携へて玉造りに精神せられました。いづれも心身を淨めに淨め一呼一吸の間にも精魂を打ちこんで研かれましたので正に祭祀文化の一致であります。

ユーモア神としての鈿女神の存在は事件進行の圓滑進捗に貢献多く、又藝術神の價値豊かに、又女丈夫としての風概の傳ふべきものがあります。すべて文化も藝術も科學も入神の域に達してこそ、逸品傑作創見の生れるものでありまして正に祭文一致であります。

產業日本の曙光としては手置帆負命は笠作り、天日鷲命は木綿作り。武神としては天忍日命の剛毅なる、天津久米命の敏功なるがあつて武勇凛々

「大伴の遠つ御祖の其の名をば、大來目主と負ひ持ちて仕へし官、海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍」（萬葉十七）の誓願牢乎として奮戰致しました。正に祭產一致、祭戰一致であります。彦狹知命は循作者として武器を作り、天目一箇神は作金者として鐵器文明の先頭に立ち、武器の製作にも傑出してゐられました。

今日戰場に於て勇士の奮鬪は確かに世界無比でありまして、武器の幼稚を補つて餘がありますが、日本刀や倭弓が四海に匹敵する者が無かつたのと比べて恥づる事無いでせうか。東洋の道德と西洋の科學とを合一する日本の使命は未だ僅に出發點にあるのみであります。武器の方面でも平凡では其の他推して知るべきであます。精神日本即科學日本即產業日本の前途多難であると云はねばなりませぬ。須らく神の記念の日本魂を鍛錬して使命を完うせねばなりませぬ。俊異な頭腦奇魂、變化自在の術魂、創作の產靈魂を覺醒せねばなりませぬ。

人生は戰爭であります。廣い意味の戰爭であります。深い意味の戰爭であります。乃木大將●兒玉大將●寺內大將の二代の精忠はさりながら、興亞の天業てふ百年戰に於ては精忠四代五代の範を仰いで進む必要の甚だ切なるを痛感致します。

陛下の軍人が命を鴻毛の輕きに比して國運を開拓した後は、必ず其の心を忘れる時なく各々本分を勉勵し、有終の美を濟さねばなりませぬ。一擢千

金を夢みたり他民族侮蔑の心を起しますと取り返しのつかない事になります。劍を以て開拓した道は鏡の公平無私と御統珠（みすまるのたま）の共同愛の精神を以て神勅の行者としての聖業を完成せねばなりませぬ。

八紘一宇（神武天皇）

區宇一家（雄略天皇遺詔）

宇宙一君（繼躰天皇、元年三月）

普天王域（安閑天皇、二年一月）

四海一歸（元明天皇、和銅一年二月）

寓内一仁（元正天皇、養老六年五月）

寰宇一君（聖武天皇、神龜二年九月）

三才一宅（仁明天皇、承和八年七月）

古者皇祖國ヲ肇ムルノ初ニ當リ六合ヲ兼ネ八紘ヲ掩フノ詔アリ（明治天皇二十六年二月）

坤輿一宇（今上陛下、十五年九月二十七日）

神武天皇の八紘一宇の皇道は同時に歴代天皇の皇謨であります

天壤無窮の神勅

語源的研究

日本語の語源には忠孝一致・忠君即愛國の誠が充實してゐます。故に神勅奉戴の精神は日本語の發生と同時に輝いてゐて、神勅以前に神勅に叶つた行爲を勵んでゐたのであります。そして年と共に盛衰して今日になりました。

一、皇國日本

○かみときみとは語源が一つであります。古來(1)かき通用の例が多く、倭訓栞にかみの條には「かみはきみなり」、きみの條に「きみはかみなり」と說いてありますのは意味深遠であります。

(1) 塚(つか)は築(つき)の意であり、强力(きやうりよく)强奪(きやうだつ)と書いてがうりき・がうたつと讀み、脚氣(キヤタキ)・格式(カクシキ)・彼奴(カヤツ)をかつけ・きやくしき・きやつと讀む。

新井白石が「神は上なり」と云つたのは、彼の政治家的風概が偲ばれ、平

田篤胤が葦芽の芽(カビ)の轉で靈妙不可思議の力ありと說いたのは、其の神がかりの風格が伺はれます。

然しながらかみの語源に就いてはかく古來諸說紛々としてゐますが、日々(か)並めて、七日(か)八日(か)二十日(か)、幾日(いくか)、霞(かすみ)、籌(かぞり)、等のかから推し考へてかみとは日見(かみ)の意で、日光の赫見(かがみ)、明見(あかり)——明々と輝き見える——意であります(日本書紀通証、倭訓栞)。

日光の照臨(しろしめす)と神明の照臨(しろしめす)とを同一に仰ぎ、以て谷川士清先生の氣魄を大いに壯なりとせねばなりませぬ。

又、鏡のまだ無かつた神代の始には日月のことを天鏡尊と申しましたのは、天日日見(あまつかがみ)尊の意で、八咫鏡を日の神の御靈代(みたましろ)と齋(いつ)き奉るのが極めて自然であり至善であるのも肯かれます。(倭訓栞による)

實に日月も神明も上に在つて照臨(しろしめ)すのでありますが、天皇の照臨し給ふのは來見(きみ)の意も存してゐます。人民は天皇を忘れても天皇は人民を忘れ給ふことが無いのであります。玉躰は九重の奥に在すと雖も大御心は常に吾等

人民の側に來てしろしめすのであります。父子の情大父母の愛を以て吾等をしろしめすのであります。

○天照大神は即ち天照大君として天照る日の照さむ限はてしなく八紘一宇に、天照る日の照さむ限とこしへに天壤無窮にしろしめすのであります。されば古典の示す所、「天照る日」は勿論、「天照る月」とも云ひ「久方の天照る月は神代にか出でかへるらむ年はへにつゝ」（萬葉集卷七）等歌ひました。又、日本の國を「天照る國」と歌ひました。興福寺の法師の長歌の一節に「あかねさす天照る國の日の宮の聖（ひじり）の御子ぞ……」（續日本後紀十九）

○おほやけと云ふ語も、天皇・皇居・公（官司）などの意に用ひますけれども、國家をおほやけと讀んだ例もあり（雄略紀七年）、軍國をおほやけと讀んだ例もあります。（天智紀八年十月）

以て天皇即國家の日本精神を伺ふ事が出來るのであります。（倭訓栞による）

○みかどと云ふ語も、天皇・皇帝・御門などを讀んでゐますけれども、帝

國・國家・日本國をみかどと讀んだ例が澤山ありまして、天皇即國家の意が明白であります。（倭訓栞による）

とまり〳〵に荒き風、浪にあはせず平けく率てかへりませ毛等能國家爾（萬葉十九）其他（雄略紀八年二月。源氏物語須磨、繪合。）我が日本國（孝德紀元年）。（天智紀元年一月。聖武天皇紀。三代實錄。十一年九月五日。十三年七月六日。十六年十二月等。）

天皇即國家たるのみならず、皇室は世界の中心であります。故に中國をみかどと讀みました。「新羅、中國に事へず」（雄略紀七年八月）。「大いに中國の心を懼れて」（同上八年二月）等の例があります。又、伊勢神宮を「神の朝廷」と景行記に記してあります。神皇一體（通證卷一）の旨明白であります。

朝廷（一般）——忠君	天皇即天地（中國）	八紘一宇	
みかど	一致＝		
國家（紀）——愛國	天皇即國家（國家）	天壤無窮	
神宮（記）——敬神	天皇卽大神（神宮）		

又、古事記にはくにをかみと崇めました。日本は神様がお產みになつたのでありますから、人は勿論草木山川も神様であります。國土も神様であります。伊豫國は愛媛といふ女神、讃岐は飯依彥、安房は大宜都姬、土佐は建依別、筑紫は白日別といふ神様であります。

かくの如く大八洲には皆各〻神名があります。

神皇一體

- 神宮——天照大神（敬神）
- 皇室——現人神（忠君）
- 國土—八洲皆神名あり（愛國）
- 父母——生身魂（孝行）

一致

○くにと云ふ語も、日本の國と云ふ時は日本全國を指し、伊勢國と云ふ時は地方名であり、「君のお國はどこですか」と。云ふ時は故郷の意であります。此處に注意すべきは朝廷の事をくにと呼んだ例の多い事であります。仁德紀には、其の始に宗廟をくにと讀み、持統紀には、其の末文に天皇の

位をくにと讀みました。清和天皇の貞觀十一年十二月の宣命には日本朝と書いてやまとのくに、我が朝と書いてわがくにと讀んでゐます（三代實錄十六）。又、皇都をくにと讀んだのは、萬葉集に「くに求ぎしつゝ」と喩族歌に歌つて（卷十八）、皇都とすべき地を求めながらの意に使つてあります。又、讓位を國讓りと申しますことは、榮華物語・宇津保物語等の諸書に出てゐます。以て綿々たる天皇即國家の信念の鼓動を察する事が出來ます。

くに

- 國家—愛國心
- 故郷—愛郷心
- 皇都
- 宗廟
- 皇位

尊皇心

一致

みや

- 神宮——崇祖
- 神社——敬神
- 氏神——孝敬
- 天皇
- 皇族

忠君

一致

○宮といふ語も神宮　神社　天皇　皇族に通用します。敬神尊皇は一であ

ります。

【二】親子の日本

おやと云ふ語は種々の意に用ひられてゐます。父母を親と云ふは勿論、天祖・遠祖・皇祖・國祖・祖國・神祖・國の親(陛下)・世の親・木の種・草の種等にも用ひます。「恩義ある親と頼む人を親方・親分等云ひます」が、備前の風俗では兄の事も親方と云ひます。(倭訓栞による)。

父母に對する孝、天祖、皇祖、國の親に對する忠誠、國祖・祖國に對する愛國、遠祖に對する崇祖、親方親分に對する報恩思想はおやと云ふ一語でまとまります。忠孝一致・敬神愛國報恩の一致を見ることが出來ます。

こと云ふ語も種々の意に用ひられ、子は勿論、まご(孫)・ひこ(曾孫)・やしはご(玄孫)乃至遠き血統の者もことかこらと總稱し、こらは轉じてからとも呼びました。

親族の事をうからやからと云ひますのは、生むだ子等(子等)・家の子等の意で

あります。

又、一般に血族のみならず廣く人間を呼ぶのに用ひられました。愛兒・手兒・稚兒・幼兒・男兒・女兒・彦・女子・水夫・舟子・網子・田子・馬子・獵夫・江戸ッ子・木偶・名子(分家)・賤者・勢子(列卒)・婿・兵兒・巫女・兄子(女から男を親しむで云ふ)など廣く人を呼ぶのに用ひました。

又、人類のみでなく一般生物に廣く用ひます。猫はにやと泣く子の意、にやこの轉、蠶は飼兒の意で子孫に對して云ひました。たまご(卵)ざこ(雜魚)、なまこ(海鼠)、たこ(蛸)等澤山あります。皆生物を呼ぶのに附けて用ひました。(鋸屑譚による)

又、一般生物のみならず、物品の稱呼に用ひられました。羽子・箱・挺子ぼつこ等がありますが、「農具にこと呼ぶもの多し」(鋸屑譚)とは注意して考へねばなりませぬ。「こは籠にて畚は布古にて振籠なり。簀をあじかと云ふは葦籠なり」。又かること云ふは輕籠なり。又もつこと云ふは漏籠なり。桿は倭名抄にあふことあるは負ふ籠の意なり。糞桶をたご(たんご)

と云ふも田籠なり、又鳴子あり……（同上）。

農夫が農具を大切に取扱ふのは今も昔も變りはありませぬ。武士が武器を神聖視した美風は、上古農夫が農具を大切にした美風を母體として生れた良風美俗ではありますまいか。

吾等は陛下の赤子であります。神武天皇は部下をお勵ましになつて親しく吾子よと二回までも仰せられた事が日本書紀に記してあります。代々の天皇は皆此の御心であらせられましたが、天皇のみならず皇后皇太后も左様に思召されたのであります。光明皇后は遣唐使を送つて親しく吾子よとお詠みになりました。（萬葉十九）（七十七、八、九頁參看）

われ〳〵は　陛下の赤子、親の愛兒●手兒であります。遠祖に對しては祖の子であります。萬葉集に「玉葛いや遠長く祖の名も繼ぎゆくものと……」（卷三）、「人の子は祖の名絶たず……」（十八）等、いづれも祖先の名を揚ぐるのに努めた遺響であります。斯くの如くこの一語からでも忠孝一致の民族性が根據づけられます。そして此の子を愛するの情を一

般の人々へ、一般の生物へと限無く押し弘め、佛教の大慈大悲の極致である萬物一體の仁にまで及ぼしました。「萬物一體の仁」とは宋儒も盛に用ひました。佛教儒教の渡來以前から其の粹を行つて來た祖先は本當に尊いものであります。然らば何が一文字なき吾等の先祖を斯くも純潔ならしめたのであります。然らば儒佛輸入後も其の長所を採つて能く消化したのでせうか。日の如くしろしめす代々の大御惠と、それに答へむがための皇民の誠から湧き出でゝ滾々洋々と流れ來つたのであります。

日本に事實あり支那印度に言葉あり。天照大神を先頭に押し立て奉り孔子釋迦を副將として興亞の天業を成就すべき機運は熟しつゝあります。美しい哉親子の日本、親子の東洋。

【三】氏の日本

自分の家をうち（内）と云ひ、家族の増加したのをうぢ（氏）と云ひます。藤原氏橘氏の氏であります。又外國に對して國内をうちと申します。又皇室をうちと申し上げて内裡・禁中等の字を宛てます。又主上をうちとか内の上とか申し上げます。又太神宮様附近をうぢ（宇治）と云ひ、皇都附近にも宇治があります。昔は宇治川を氏川とも書きました。[1] 古風土記に「宇治の郷を以て内の郷となす」との明文があります。又、上代には

うち（うぢ）
- 主上・御所（うち）
- 御所附近（うぢ）
- 内
  - 家の内（うち）―孝悌
  - 國の内（うち）―愛國
- 氏（うぢ）――――崇祖
- 神宮附近（うぢ）――敬神

忠誠　一致

夫妻互にうちと云ひました。又今日も心の中の事をうちと云ひます。「内には思へども」と云ふのは心の中で思ふけれども、と云ふ事であります。

(1)（續群書類從神名秘書）七九。

【四】まことの國日本

まことヨみこと

昔から正直の頭に神宿ると云ひます。神のみこと、君のみことは實に誠であります。道德の結晶が神命君命であります。君命神命以外に道德は存在致しませぬ。

まこと・みことのまとみは同行で古來通用した例が澤山あります。笑まひは笑みの延音であり、こまかしはこみいる、海人（あま）は網（あみ）と類似の語であります。やまひがやみとなりましたのもまみ通用の例であります。

されば詔勅（みことのり）は道德の極致であります。然しながら詔勅（みことのり）（御言宣）は同時に御事（みこと）（聖業、聖德）であり、玉體（命）でもあります。歷代の神々及び天皇

は[1]心言行一致して人民を愛撫し給ひましたからみことと云ふ語についてまことと云ふ弟分の語が出來たのであります。(1)（通證和訓栞）

玉體（命）
- 大御心（叡慮）――心
- 大御言（詔勅）――言
- 大御事（大御業）――行

＝誠……

- 直心――心
- 直言――言
- 直事――行

一致

まことは實にみことに對する感謝感激信頼の聲であります。此の神代皇代一貫の大御惠は下民を深く感化し給ひまして國民も相互に誠を以て心を照し合ひ、わが信頼する人には博くみことと言ふ語を用ひるやうになりました。萬葉集を一寸繙いてみましても、父の命・母の命・兄の命・弟の命妻の命・妹の命等の例が出て來ますが、もと〳〵神のみこと・君のみことが本義でもあり數に於ても最も多く用ひられてゐます。

みこと（まこと）
- 本來の意義
  - 神のみこと（敬神）
  - 君のみこと（尊皇）
- 轉用の意義
  - 父のみこと
  - 母のみこと
  - 兄のみこと
  - 弟のみこと
  - 妻のみこと
  - 妹のみこと

（孝）（悌）（和）

一致

【五】まつりの日本（神國日本）

祭と云ふ語は、今日祭政一致と熟して盛に使用せられてゐます。神樣をお祭りする心持で政治を行へと云ふのであります。上古はまつりとまつりごとが一つで、神宮と皇居とが一つでありましたが、崇神天皇の御代に寶鏡及び靈劍を大和の笠縫邑にあがめ奉つてから神宮と皇居とが別になりまし

たが、敬神の念から別にせられましたのですから、神皇一躰祭政一致の意味は益〻深められました。

又、神まつる心で天皇に忠良でなければなりませぬ。まつりを延ばして

まつらふとも云ひますのは、申す　曰ふを申さく　いはくと延ばして丁寧に云ふ如く、まつると云ふ語を丁寧に云つて、元よりの忠順・新に歸順したものを共にまつらふと云つて一視同仁の皇化を謳歌し奉つたのであります。「はふ蟲も大君にまつらふ」（雄略紀）は忠順、「大君にまつろふものと言ひつげる」（萬葉十八）は傳統の忠誠を誇り、「まつろはぬ人をも和し」（同二〇）は歸順せぬ人を従へ和合させる意であります。

まつらふ（まつろふ）
- 忠誠（積極）
- 忠順（消極）
- 元より
- 歸順……新に
- 一視同仁

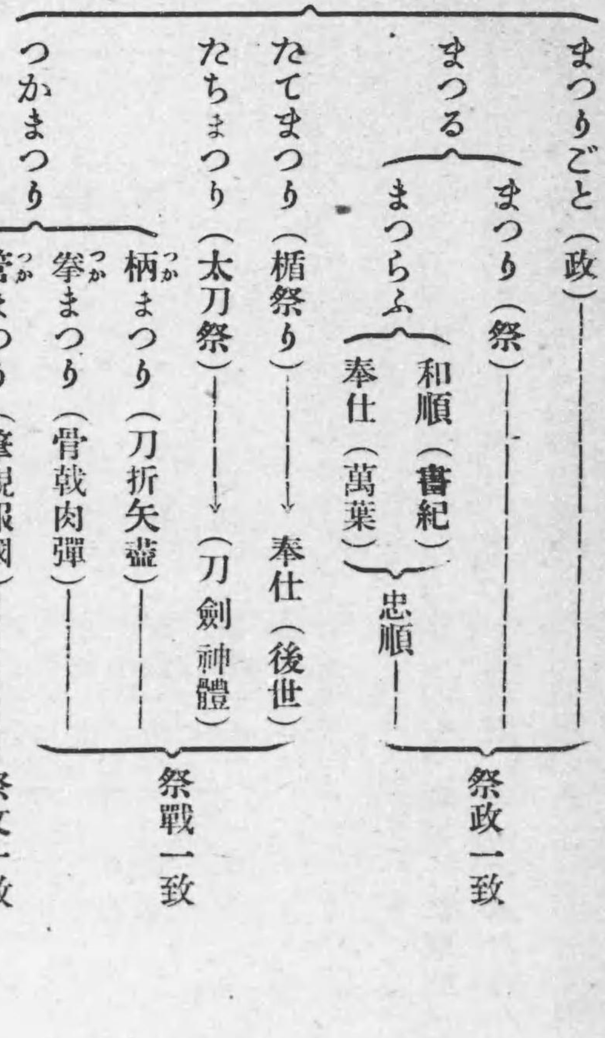
又、たてまつると云ふ語があります。石をたてゝ祭る、花を立てゝ祭る、誓を立てゝ祭る等種々の場合もあつて、種々の意に用ひられてゐますが、

われ〳〵の最も壯とする所は、神武御東征に際し、(1)蓼津に敵前上陸した皇軍は、強敵を峠にまで追ひ上げ、五瀬命の御負傷で軍を班されましたが、「敵敢て追はず」と書紀に書いてある如く、(2)長谷（南洋語？）に驅馳してゐる骸長き賊軍も追撃出來ないまで痛めつけて置いて再び(3)蓼津に於て勢揃へして御舟に乘り給うた時に「此の身體は此の楯と共に碎けよう」と楯を立てゝ雄誥びせられました楯祭りこそは正に祭戰一致であつて、奉り中の奉りであります。保食神(4)（豐受大神）が天照大神の御使に百机の御馳走を奉られた祭農一致も、三女神に天孫降臨を助け奉れと仰せられて御降臨の準備にお降し遊ばされたのも、國つ神が奇稲田姫を素戔嗚尊に奉られたのも、素戔嗚尊が神劍を高天原に奉られたのも、皆神武天皇が「楯祭りの神事」に見えた粉骨碎身の至誠と一脈の相通ずるものがあるのを思はしめられます。此等は何事も祭戰一致を行ふた實例でありまして、單に祭政一致祭農一致に止まるべきでない模範であります。

(1) 記　(2) すねは南洋語だとの説あり　(3) 紀　(4) 異名同神の説による

又、塚祭りと云ふ語があります。親の塚祭りは孝、偉人の塚祭りは崇拜、知人の塚祭りは冥福、恩人の塚祭りは感謝であります。倭訓栞には日本書紀に柄、源氏に筆管（軸）、古事記に拳をつかと讀んだ事が記してあります。柄祭りは刀折れ矢盡くるまで戰ふと云劍の柄祭りで、拳祭りは刀折れ矢盡きてもまだ〳〵肉彈骨戟があるの意で柄祭りと共に祭戰一致の極であります。管祭りは筆硯奉公、文章報國の類で正に祭文一致であります。吉田松陰は「自分の思出に赤間石の硯を祭つてくれ」と云つたのも祭文一致であります

天孫御降臨に際し、高產靈神は「吾は則ち天津神籬及び天津磐境を起したてゝまさに皇孫のために齋ひ奉らむ。爾天兒屋根命・太玉命、宜しく天津神籬及び天津磐境を持ちて葦原の中つ國に降りて皇孫のためにいはひまつれ」と。仰せられました。此れ八百萬神を率ゐて皇孫を護り奉るべき神誓であります。われ〳〵は祭政一致・祭戰一致・祭文一致・祭農一致・祭敎一致等各〻其の本分に精魂をうち込んで皇運を扶翼し奉らねばなりませぬ。



（附）新年季題に見えたる祭の日本

御代の春

拜賀●初詣●神の春●政事始（祭政一致）
君が春●父母の春●四方の春（祭教一致）
讀初●書初●御講書初●蹈歌（祭文一致）
騎初●弓始●陸軍始●稽古始（祭戰一致）
手斧始●鑄物始●初細工（祭工一致）
店卸●帳綴●初商●初市●初荷（祭商一致）
鍬入●鋤始●山開き●繭玉祝（祭農一致）
舞初●お能始●初場所●織初（祭藝一致）

神國日本

ひんがしに大阪城や出初式（古鐘）
騎初や碧蹄館をこゝろざし（曉峰）
元日や家にゆづりの太刀佩かん（去來）の古雅なのや、初飛行に東亞一翔の氣魄を見せたり、驢馬の引く野砲の行列を「陸軍始」の句に詠み込んだり致しますのは、初春に於ける敬神の氣分と長期戰線の心持とがよく現はれてゐまして、正に祭戰一致と云ふべきであります。

榮えよと大福帳を綴りけり（玄花）
海原へ心を放つ初日かな（事紅）
其の他、茫々たる大陸に大きく出た初日を詠んだ句などは、いづれも國威國富を海外に廣めんとする興亞の雄風の凛たるものがありまして、正に祭商一致であります。
回禮や裝もとかず吉書かな（洲山）は勿論、讀初に神の國產みを詠むだり、刀とる心で力をこめて試筆するのを詠むだ句など正に祭文一致と云ふべきであります。
元日や鬼ひしぐ手も膝の上（梅室）
額づけは神風潔し初詣（句佛）
元日やまづ思はるゝ君の恩（千國）
初春やけさの心をいつまでも（桃里）は祭教一致
元日や疊の上に米俵（北枝）

元日や親のゆづりのやせ畑（泥中）

鋤初や牛に祝はす米の飯（馬瓢）

山開き寺へ寄進の薪かな（素泉）

鍬初や親のゆづりのやせ畑（泥中）

古鍬をとぎすましたる飾かな（鬼城）

きゝ馴れた雞も初音よけさの春（鬼卜）は祭農一致。

總合して考へて見ますと、斯くの如く皇國は實に一大祭壇であります。水も土も皆まつらるゝのであります。

荒磯の岩も祭りし惠方かな（朱人）

岩かどに飾かゝれる泉かな（泊月）

斯くの如く皇國は一大神域であります。未だ嘗て外敵に汚されないのも理由があるのであります。幕府極盛の元祿時代から榮えてゐる此の俳句でも敬神を通じて斯く迄も皇天皇土皇海の烈々たる信念が燃えてゐます。而して今や更に〳〵目覺めて、大いに興亞の神光を以て八紘を照し、聖火炎々

として世界の魔衆を燒き盡さねばなりませぬ。いでや挺身奮躍、聖火の薪の一本の役目を果して然えん哉。

滿洲の野に大いなる朝日かな

元日や神代の事も思はるゝ（外宮祀官守武）

おれにいはしやまづ御代をこそ千々の春（北村季吟、一說に一茶）

岩戸出し時もかはらぬ初日の出

元日や一系の天子不二の山（內藤鳴雪、新俳句）

日本から出た日を拜む國ばかり

元日や一億萬の御慶かな

もろこしも日の本やまづ朝霞（里村紹巴）

君と親のめぐみ思ふや國の春

天壤無窮の神勅の意義

【一】神の御言葉のひびき

葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地也。宜爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆、當與天壤無窮矣。（日本書紀、神代卷下）

神勅は日本書紀に引證した一書に出てゐますから其の本文よりはずつと古いのであります。葦原を（1）豐葦原・（2）大葦原に作る古典もあります。

（1）古事記上。大祓祝詞。出雲國造神賀詞。日本書紀神代卷上の異本。常陸風土記。
（2）倭姫命世記。御鎭座次第記。

神勅を漢譯しました時、可王之地と就而治とが寘韻、寶祚之隆と天壤無窮とが東韻を押してゐます。其の意を用ひて譯し奉つた事がよくわかります。謹しんで按ずるに、語部の長が集會の度毎に、又祝祭日の劈頭に、渾身の言靈を躍動させて朗誦申し上げましたから、漢譯の時にも押韻致しましたのでありませう。

國語として拜誦致しますと、

あしはらの（海國日本）
ちいほあきの
みづほのくには（產業日本）
これあがうみのこの
きみとますべきのくになり（神國日本）

天皇即國家。之が日本の正しい姿で、神武天皇は養正と仰せられました。ののの腰韻とくにの脚韻と、歩武堂々合唱して進軍致しませう。文に武に農に商に。

いましすめみま
いでましてしらせ（百姓を自明につき省略）さきくましませ

天皇即大父母。皇孫は皇神であり天皇であります。いざなぎの神から天照大神に、大神から皇孫に授け給うた御統勾玉を此の時御頸に掛け給うたのであります。いの頭韻せの脚韻。

しらせとは日の光の日の本を照し親が子を愛する如くにしろしめすのであります。あゝ神鏡さやけき皇國日本。

行矣（さきくましませ）とは、御いつくしみの溢れた壯行の御詞であります。億兆をはぐくみ給ふ仁君の大勇としてのお諭しであります。故に叢雲の神劍の威靈も神武天皇の積慶も同じ大御心であらせられます。

あまつひつぎのみさかえまさむこと

あめつちのむたきはまりなかるべし

天皇即天地。あの頭韻は、け高く勇ましく大神の御聲を偲び奉ります。

そして我々は雙手を擧げて陛下萬歳を合唱申し上げずには居られませぬ。此れ正に神武天皇の重暉—みいつを重ね給ふ—に當ります。

神勅（皇位一元）
- （天皇即國家）皇國（みくに）……土地（孟子）……領土（西洋）
- （天皇即大父母）皇民（たみ）……人民……住民
- （天皇即天地）皇位（みくらゐ）……政事……主權

國家（三要素）

- 葦原の（海國日本）千五百秋の
- 皇國
  - 瑞穗の國は（產業日本）これ吾が子孫の
    - きみとますべきのくになり（神國日本）
    - いましすめみま（御統匂玉の日本）
    - いでましてしらせ（神鏡さやけき日本）
    - さきくましませ（叢雲劍の日本）
  - 皇民
    - あまつひつぎのみさかえまさむこと
    - あめつちのむたきはまりなかるべし
  - 皇位
- 天照大神（天壤無窮）

天皇即國家＝羹正

天皇即大父母＝積慶

天皇即天地＝重暉

神武天皇（八紘一宇）

古事記及び日本書紀の一書は、八紘一宇の天御中主神の御光に筆を起して世界的使命を說き、日本書紀の本文等は天壤無窮の國常立神の稜威（みいつ）に文を始めて國民的自覺を喚起してゐます。時間的無限の天壤無窮と空間的無限の八紘一宇とは一にして二ならず、國常立（1）神即天御中主神であります。天照大神即神武天皇であります。そして明（2）治維新は神武天皇の皇謨の復興で

あります。昭和維新は神武皇猷の恢弘に他ありませぬ。(1) 日本書紀通證卷二に同一体となす。(2) 慶應三年十月八日の告諭に『諸事神武創業の始に原づき』

(2)代々の天つ日嗣は即ち是れ今日の天照大神であります。今上天皇陛下は即ち是れ今日の天照大神であります。畏くも今上天皇陛下が、

負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

と仰せられましたのは、神代遙けく大神の御聲に聯つてゐるのを拜するのであります。而して負荷の大任とは申すまでも無く天壤無窮の皇運を扶翼し奉つて八紘一宇の天業を恢弘する第一次として興亞の天業に精勵することであります。(2) 日本書紀通證卷八

【二】やたの鏡の日本

天照大神様が天の窟にかくれまし〳〵た時、天津眞占を招いて(1)天棚戸神と御子石凝姥神とがお造り致しました。然るに最初の製作は少しく意に叶はないとの事で、二回目にお造りになりましたのが八咫神鏡であります。同時に矛もお造りになりました。

初度の鏡と日矛とは、今日の紀伊の日の前●國懸の二大神であります。三神の精誠の凝つて二回目に出來上つた鏡と申しますだけでも其の威靈の尊さは推して知るべきであります。まして日の神の御姿を映し奉るために造られたのであります。御靈代として齋けと仰せられた鏡であります。

實に日の神の御魂の宿り給ふ御鏡で、普ねく古今の治亂、内外の興亡、人心の善惡を纒はしまして、善を映し留め惡を(1)映し去り給ふのであります。日の神及び日嗣の神は此の御心を以て日の光の隈なきが如くしろしめすのであります。之に感激して猿田神(2)は八咫鏡の如き目玉を光らせて凶賊を鎮定して高千穗に先導申し上げ、八咫烏は名にし負ふ雄々しさを以て神武東征に峻險を御案内申し上げました。

後世「葉隱論語」に「善き眞似は眞似ぬが損、惡しき眞似は眞似るが損」と誌しましたのは、善惡をみそなはす御精神に從つた名言であります。此の朝日の如くくもりなき心、否朝日は曇るの時があつても曇ることのなき、此の曇ることなき御光を體してこそ和魂も本當に本領を發揮して、複

雜怪奇の世態にも眩惑せられず誠道直進して家和し、村和し、天下和し、奇魂も其の使命を顯揚して、和魂漢才佛才は云はずもがな智識を世界に求めて皇基を振起する事が出來、術魂も變化の妙を極めて世道人生に益する幾多の創作發見が行はれるのであり、幸魂も活動の道を誤らず人にさきがけて働き、誘惑を避け凶惡を裂き世の幸の爲に竭し、以て神鏡の御光に副ふやうになる事が出來るのであります。然らずんば、あたら日本魂も人を知り己を知る事を誤つて事物の根源を洞察する事が出來ず、千變萬化の皮想觀察に忙殺せられたり利用せられたりばかりしてゐるのであります。

(1) 常陸風土記、十五。(2) 眼八咫鏡の如く(古事記) (3) 浩天上人

又、われ〳〵は三神が神鏡を研き奉つた心を、どこまでも體得感佩して精神(言靈)と技能(事靈)とを研かねばなりませぬ。言靈と事靈とを混用して考へ躬行を重んじた古風は、萬葉集に許多の例があります。祖先を辱しめないやうに精神技能を研かねばなりませぬ。道德と科學とを研きに研かねばなりませぬ。精神一到して技能は上達し、技能を上達せしめると精

神も鍛へられる事になります。學的良心旺盛にして科學は進歩し、科學を進歩させる事によつて道德も開眼致します。誠は眞事であります。

(1) ことだま(倭訓栞) (2) まこと(倭訓栞)

【三】まが玉の日本

八尺瓊勾玉は彌榮の美しい齒牙の形の曲つた玉と云ふ意であります。御祈御統珠であります。御祈御統珠とは、皇運を壽ぐために造つた、緒で貫いた珠の意であります。齒牙の形して曲つてゐる頭に孔があつて、其の孔を緒で通した多くの珠を頸にかけたものであります。支那の拱璧の如く個躰美を競ふのではありませぬ。印度の瓔珞の如く金銀の裝飾を誇るのではありませぬ。緒で統べ貫いた結びの魂であります。產靈の魂であります。結合の心、創造の力であります。

(1) 天御中主神は御頸に項がし給うた御統の勾玉をいざなぎ神に傳へ給ひ、いざなぎ神は之を天照大神に、大神は之を天孫に賜うたのであります。實に無限の古今を統べる御統珠であり、無數の人心を統べる御統珠であります。

古今を一貫し億兆を一體として皇運を壽ぐ所に勾玉の御敎は籠つてゐます。古代の神々が御統珠を頸にかけ給うた麗はしい心を懷しまずに居られませぬ。(1)(2) 日本書紀通證卷六

天照大神を皇太神、天皇を皇尊と申し上げ、日本を皇國と申しますのは、日本が神國であり皇國である信念理解の表現であります。日本軍を皇軍と申しますのは神樣の兵隊であり陛下の兵隊である證明であります。此等の語の中ですめらみことが最も多く用ひられて來ましたのは皇國日本の意極めて明白であります。天皇こそは億兆の人民と年代とを統べ給ふものであります。八紘一字・天壤無窮の主體であります。

御統珠の敎
- 時間的 天壤無窮 — 古今をすべる
- 空間的 八紘一字 — 内外をすべる
- すめら
  - みかど（天皇）
  - みかみ（皇太神）
  - みくに（皇國）
  - みいくさ（皇軍）
- 一致＝皇國民のみち

勾玉の齒牙の形は養ふ意であります。身を養ひ親を養ひ國を養ふのであります。どんなものでも消化する齒牙の德を推し弘めたのであります。親を生神樣と崇める生身魂、仁以て人に交はる睦魂、社會に應酬する世間魂であり、國民精神・護國の責任としては國魂となります。

(1) 通證・倭訓栞では、愛國心愛鄕心の意に解してゐますが (2)太閤記十七關白の條には一國の柱石たる責任の意に解してゐます。

其の歷史は短きにせよ獨逸には獨逸魂、伊太利には伊太利魂があります。之を理解活用させる所にムッソリニーなりヒットラーなりの長所があるのであります。獨人伊人乃至英米人の長所となるのであります。假令八尺の大男でも一寸の魂が變になると狂人であります。少彥神や義經ガンヂーの樣に小男でも魂が研かれて居りますと大人物であります。況んや娘にして猫の魂、獵犬にして翫犬の魂は困つたものです。況んや智識階級の失魂離魂狀態に於てをや。研きに研かねばならないのは世界無比の日本魂であります。

大國主神は大和の大神神社に己の和魂、奇魂、幸魂を留めて皇國を護り、荒魂を玄海灘に留めて國難を拂ひ來つてゐられます。日蓮は「われ日本の

柱とならん」と叫び、豊臣秀吉は敢然國の柱石を以て自ら任じ國魂の使命を高唱致しました。何故に碎きし身ぞと人間はゞそれと答へむ日本玉之譬（谷川士清）。

【四】叢雲の劍の日本

高天原を逐はれた素戔嗚神は、着のみ着のまゝで荒正の太刀を揮つて八股の大蛇を寸斷し、天孫民族東方發展の先鋒テナヅチ・アシナヅチを救はれまして、中國地方に侵略してゐたアイヌの害は根絶せられました。單身漂泊の身を以て力闘し、萬死を出でゝ一生に獲られた寶劍を高天原に獻上せられました。其の嚴罰を恨まないのみならず、「斯くの如き寶劍を私するのは勿體ない」と。御子天葺根神を遣はして恭〻しく献上せられました。此の滅私奉公の精神は、其の勇智と並べて神道臣道の範であります。古來荒魂と稱してゐますのは、常に疲勞を恢復して新になつて進むといふ氣象と、改む—改過向上—と云ふ精神とが合體してゐます事は、素戔嗚神が實

例教訓をお示しになつたのでもわかります。

又、神武東征の靈劍を韴靈とも申します。わが高倉下は之を奉げて大和の背面攻撃に役立たせました。ふつとは物を截ち斬る音であります。ぶつ斬りの劍であります、手腕であります、精神であります。人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬、受けた太刀をも截斷するのであります。之を以て高倉下は天業を輔翼し、神武天皇に忠烈を擢んでたのでありました。

神武天皇の御名は磐余彦と申し上げます。いはれとは巖と云ふ名詞から行の動詞になつたので、巖の如く頑張ると云ふ確乎不拔の御氣象を伺ひ奉る事が出來ます。實に非常な耐久力であります。然し此の耐久力の乏しいのは日本人の短所でありますが、われ〳〵の祖先は此の短所を補ふために、張魂とか不負魂とか云つて自ら鞭打つて來たのでありました。國家でも個人でも最後の成功は、一時的勇猛心よりも此の耐久力に依つて成就した例が多いのであります。われ〳〵は神武天皇中興二千六百年に當り、神武天皇磐余彦の大精神を服膺し、以て天皇の八紘一字の第一次作業としての

興亞の天業を完成せねばなりませぬ。（1）　飯田季治『日本書紀新講』

○

天孫御降臨に際し、天照大神は祭祀を司る天兒屋根命・太玉命に「ねがはくば爾二柱の神も亦同じく殿の内に侍ひて善く防ぎ護ることを爲せ」と。仰せられました。此れ神代の軍人勅諭であります。祭戰一致の詔であります。古來幾多の志士は屍を曠野に横たへても、魂魄は殿の内に侍うたのでありました。

露の身は武藏の野邊に消ゆるともたまは護らむ九重のには（久留米の志士、松浦八郎）

よしや身はいづこの浦に沈むとも魂は都の空に留めむ（但馬の志士、仙石貞雄）

今日、東亞の大計を磐石の安きに置かんとするには、國家の總力を擧げて祭戰一致の氣魄を以て奮勵せねばなりませぬ。總べての人が生命を天照大神即今上陛下に捧げて進まねばなりませぬ。外交官も經濟家も。

目下、軍備は勿論、外交に於ても經濟に於ても世界の叢雲は濛々として急襲待機の姿勢であります。荒正の名刀即ち豪勇と正義とを以て大蛇の害を根絶せねばなりませぬ。

【五】葦原の日本（海國日本）

日本は葦原の國であります。海國であります。國常立神の次に出で給うた大苫邊神は夙に八重の潮路を踏波する雄志に滿ち給ひ、イザナギ神が八百萬神をお生み下さつた時に、先づ海神を生まれました。天照大神樣の御妹月讀神及び若日霎神は青海原の潮の八百重をしろしめし給ひ、大神の御子三柱の女神は天孫降臨の準備として、

「汝三柱の神、よろしく道の中に降りまして天孫を助け奉りて天孫のためにいつかれよ」との神勅を奉じて北九州に天降り、宗像郡を中心として活動なされました。

其の勢力は、葦原の醜男―海國の健兒を以て自ら任ずる大國主神を助けて日本海方面にも及び、屹として東亞海上鎮護の祖となり給ひました。御子

孫は神武東征に從軍して靈を嚴島に留め、永く瀬戸内海近畿の鎭衞に心を碎いて下さるのでみります。

瓊々杵尊の皇后木花咲耶姫は海島にお育ちになり、御子火出見尊は山幸彦として勤勞を生命としてゐられまして、海神の輔佐を得て天業を益々恢弘せられ、其の后も海神の女豐玉姫でありました。豐玉姫の家は代々豐玉彦と稱して常に萬世一系の神位を直接間接にお護り申し上げてゐました。火出見尊の御子は鵜草葺不合尊であります。その后も海神の女玉依姫であらせられ實に神武天皇の母神であります。神武天皇の御兄稲氷命、御饌入野命の御二人は壯年時代は海外に雄飛し給うて老年になつてから神武天皇を輔佐せられまして、能野灘の暴風に遭ひ、神器及び神武天皇の御無事を祈りつゝ稲氷命は護國の鰐（さひもち神）となられ、御饌入野命は皇威に仇なす海魔を誅するために、海底深く突入して掃魔の劍を閃かし給うたのであります。歴代の神々の海上の雄飛は斯くの如く綿々として雄々しく、部下の武者振も亦凛たるものがあります。猿田大神の老齢を以て海に沒し給

ふや、先づ泡咲く御魂となつて華々しき英雄の功業を偲ばしめ、次につぶ立つ御魂となつて不屈の勇ましさを語り傳へ、終に底ぢく御魂となつて洞然として緣の下の力持の尊さを示されました。海に育つて海に果てられました。實に海國男兒の典型であります。海行かば水漬く屍、皇運を開拓した猿田大神は忠臣中の忠臣、海國男子の中の男子でありました。

古來の學徒が天つ神國つ神だけを說いて、海つ神を說かないのは海洋思想の無い支那かぶれの說であります。（通証卷八による）

【六】みづほのくに（産業の日本）

イザナギ神
- 金山彦（鑛物神）
- 埴山姫（土壤神）
  - 大年神
  - 稚産靈神
    - 豐受姫神（保食神）

豐受姫の御系譜につきましては、イザナギ神の御子とする說と御孫とする說とありますが、今、御曾孫とする說に從ひます。

鑛物神●土壌神を祖とし、農業神を父とし伯父として生れ給うた豊受神は、日本を瑞穗國として下さつたのであります。蝦夷の居た頃には瑞穗でなかつたであります。

記紀には筆を揃へて、陸に向へば口から五穀出で山に向へば鳥獸出で海に向へば大小の魚が出たと、神德を稱へてゐます。其の神去り給ふや頭上に牛馬、額に粟、眉は蠶と云ふ風に身體髮膚悉く殖産興業の資と化せられたのであります。

御神德は決して食物の神樣であるに止まりませぬ。大殿祭の祝詞には「屋船豊受姫」の名で住居の神樣であります。伊勢大晦日の夜油神事の祝詞には酒の神樣であり、江の島や氣比では海上の神樣としてお祀りしてゐます。此の樣に豊受姫神は日本産業の大本の神樣であります。産業日本の世界的使命へ進擊致しますには豊受神の三代一貫の御苦心を感佩銘記して絶えず自己を鞭うたねばなりませぬ。

天照大神は新嘗祭を御親ら遊ばされました。天孫御降臨に際し稻穗の神勅

を降されました。御神勅に曰く、「吾が高天原にきこしめす齋庭のいなほを以てまた吾が兒にまかせまつる」と。天照大神のきこしめす米は天皇陛下のきこしめす米であり、さうして下萬民の食するものであります。米の一粒一粒を通しても神人一躰であり上下一致であり一億一心であります。米一粒にも御降臨の精神は籠つてゐます。さて高天原の稻穗は日本全體に豊作を競ふ樣になりましたが、今や東亞全體に蒔かせまつるべき時は來たのであります。

或は曰く、いね●いなほ等はいのちと語源が一つであると。故に古人は一粒でも菩薩だと崇めて粗末には致しませんでした。興亞の天業は米一粒の中にも宿つてゐるのを味はふ所に其の大業は成るのであります。

神武天皇降二于天一、皇紀二千六百年。天壤無窮ノ神勅輝キ、
八紘一宇ノ皇道宣ブ。興亞ノ聖戰實ニ天業、一億一心誓ツテ期レ全キフ。

神武天皇御東征の御戰略

私は茲に謹んで　神武天皇御東征の御戰略の一端を偲び奉りたいのであります。

想ふに日本獨特の戰略は、其の殆ど全部が　神武天皇様に始まつてゐるのであります。そして其の戰略は、つまり　神武天皇の御製の一節「神風の伊勢」の五字にまとまるのであります。いせとは五十鈴川の五十鈴の約つたのであります。三つや四つの鈴ではありませぬ、澤山に連なつた鈴であります。何十何百といふ鈴がさや〳〵と一緒に鳴るのであります。千人でも萬人でも同じ心持で血潮は高鳴るのであります。一億一心の共鳴であります。

神風ほど勇ましいものはありませぬ。どんな强惡なものでも吹き飛ばします。神風ほどめぐみ普ねきものはありませぬ。生物は皆育ちます。

實に　神武天皇の良民を愛撫し給ふは、神風の惠普ねきが如くであります。强暴を碎き給ふは神風の雲を吹き拂ふ如くであります。

今からわが鄕土、伊勢安濃津の國學者谷川士清先生。本居宣長先生より二十一年前に生まれた「神勅と日本魂」の行者谷川先生の研究を骨子とし、他の學者の研究を以て補ひつゝ古今東西に冠たる　神武天皇の御戰略の一端を申し上げます。

【一】　先づ長期戰の準備について申し上げます

御東征は長い〳〵準備に基づいて行はれた六ヶ年の長期戰でありました。

陸軍の總大將道臣命は、其の祖先の高皇產靈神が天御中主神をお輔け遊ばされて以來、同じ名の御子孫は　天照大神樣をお輔けになり、その御子天忍日命は天孫の御降臨を、御孫天津日子咋命は彥火火出見尊を、御曾孫天津日命は鵜草葺不合命を輔佐遊ばされ以て御玄孫の道臣命に至つて、精忠六代を玉成せられたのであります。

又、御東征の詔に仰せられてゐます「はた又、鹽土翁に聞きしに曰く、東

に美國あり青山四方に周れり」と、ある參謀の鹽土翁は天孫御降臨の時、カササの岬の御みちびきを承りました。次に　神武天皇の御祖父彦火火出見尊をお輔け申し上げて以來、代々同じ名前と役目とを相傳へて忠誠を勵まれたのであります。精忠三代鹽土翁であります。

海軍の大將である椎根津彦（一名珍彦）は、父の武位起命の遺業を繼承して佐賀關を中心に瀬戸内海方面にかけて勢力を擴めてゐられたのであります。海を見る事陸の如く、龜の背に乘つて御東征をお待ち申し上げたのでありました。

日の御子を迎へまつりしいにしへの國つ御神も龜に乘りけり（平賀元義）

大君は萬代ませと龜のせにのりて仕へし人もありけり　（水谷氏古）

とは之を歌つたのであります。斯くの如く上下一致して帷幄參謀に陸軍に海軍に三代四代と相傳へて準備經營を怠られなかつたのであります。子々孫に傳へて海陸共同策戰を練りに練られたのであります。

彼のアレキサンダーやナポレオンの覇業の二三年の準備で、朝に成つて高

樓に花笑ひ、夕に廢れて殘礎に月悲しむ者とは頗る異るのであります。又彼等の英雄は一身の征服慾の爲でありますが、　神武天皇樣は東方へ〳〵と發展する天孫民族の間に統一なくして內輪揉めのあるのを一洗し、アイヌ、土グモなどから受ける苦しみを救はむが爲めに、畏くも愛し給ふ國民のため御身を以て艱難の先に立ち給うたのであります。

又　神武天皇の母君及び祖母君が北九州及び瀬戸內海の一部に活動せられた海つ神の御女であらせられた事も御代々の御準備と合せ考へねばなりませぬ。又、北九州の鎭であります英彦山には　天照大神樣の御子天忍骨尊がお祀り申してありまして、御東征の砌に勅使をおたてになりました。實に御東征の天業は　天照大神樣以來、御代々の周到な御準備に基づいて爲されたのであります。瓊々杵尊の天降りを第一回の天降りとすれば神武天皇の御東征は第二回の天降りであります。

省みるに、今日行はれつゝあります興亞の天業は、十年や二十年で出來上るものではありませぬ。精忠三代四代乃至六代と相傳へて御東征を輔翼し

奉つた群がる猛將烈士の御手本を、我々は言行一致で受けつがねばならなせぬ。

【二】 次に連絡綏撫しつゝ進軍せられました事に就いて申し上げます

今日安藝の廣島と備前の岡山とが中國地方の中心都市であります如く、御東征當時は安藝の埃(え)の宮と吉備の高島とが瀬戸内海の中心都市であつたのでありませう。埃宮は今の宇品の北方に在ります。こゝに二ヶ月餘ましまして聖戰第二年の正月をお迎へになりました。其の行在の迹には素盞嗚命と大國主命と　神武天皇との三座をお祀り申し上げてあるのを拜察致しますと、山陰地方へも連絡綏撫の御工作が行はれた御苦心の程を畏こみ奉らねばなりませぬ。幕末に吉田松陰が死刑を受くべく關東に送られた時、

安藝のくに昔ながらの山川に
はづかしからぬ此の度の旅

と歌ひましたのは、蓋し建國の昔を偲んで勇み立つた歌でありませう。

それから吉備の高島には三ヶ年間御駐蹕遊ばされて軍備を整へられました。今日その御遺跡は備中を中心として備前・備後等六ヶ所に跨つて存在してゐますのは、轉た御準備の周到さに感激致しますのであります。

【三】 次に　神武天皇に始まる佯攻(やうこう)（だましぜめ）と本攻（目的地の攻撃）の事について申し上げます

神武天皇の御東征も愈〻第五年目になりました。聖戰は第五年目になつて益〻激烈となりました。今の奈良縣の西北を根據とする長髓彦をお討ちになります時、北方から攻める樣に見せかける爲に淀河を泝つて枚方(ひらかた)（當時は白肩津と云ひまして大阪灣が此の邊まで灣入してゐました）。此の枚方から天の川を泝つて佯攻をなさいました。次に南方から攻めるやうに見せかけて立野越から攻めるまねをなさいました。そして本攻として盾津へ御上陸遊ばされたのであります。枚方は奈良朝以後東洋進出の出帆地であり、堺は後世へかけての策戰上の要地でありましたのを考へましても、神

武天皇の行はれました佯攻は、だまし得る可能性の最も多い地點をお選びになつたのでありました。淀河といふ名稱は、川上で　神武天皇の御生母玉依姫一名淀姫をお祭りになつたからと申します。そしてその佯攻は後に於て長髓彦の根據地をお攻めになる時の地理研究に役立つたと云ふ人もあります。

【四】　次に敵前上陸が　神武天皇樣に始まる

と云ふ事について申し上げます

北方からと南方からと佯攻はなされましたが、敵もさる者で、皇軍の盾津上陸を防ぎましたが、勇敢なる皇軍は楯を左に持ち、劍を右に振り上げて上陸せられました。之が盾津といふ地名の起りであります。昔の盾津濱は今日、大阪の築港から直線距離東方五里の奥に在ります。

獨木舟に乘つて來た皇軍は、いくら多いと云つても知れてゐます。此の少い兵力を以て、待ち構へてゐた群る敵を追ひ散らすだけでも立派な敵前上

陸でありますのに、おまけに大敵を日下坂まで追ひつめ追ひ上げました。五瀨命の御負傷で攻擊中止を命じ給ひ、整然として軍を班されました。日本書紀に「敵敢て追はず」と記してあります如く、山嶽戰に長じてゐた名にし負ふ長髓彦も、退く皇軍の小部隊を追擊出來ないまでに痛めつけられたのであります。されば長髓彦が若し無理に追擊致せば、諸葛孔明の退却を追擊して戰死致しました張郃と同じ運命に陷つたのでありませう。

【五】　次に　神武天皇樣に始まる拂曉戰について申し上げます

日下坂の攻擊の時　神武天皇が戰鬪中止を命ぜられました時、「自分は日の神の子孫であるのに、東方に向つて賊虜を討つのは、天つ神の道に逆つてゐる。今度は祖先の神々を手厚くお祭り申し上げ、背に日の神の御影を負つて戰はう」と仰せられました。此れ實に祭政一致に止まらず實に祭戰一致であります。そして日の神・日の光・日の本などの日は朝日を指すのでありまして夕日を指すのではありませぬ。日の光が背に負へるのは朝だ

けであります。でありますから、「日を背に負つて戰はう」と仰せられましたのは、「拂曉戰をやらうぢやないか」とのお諭しであります。然ー拂曉戰の勝利は聖戰に限るのであります。谷川士清先生は「若し惡しき心を以て日を背に負うて戰ふとも決して勝を得べからず。若し忠誠以て日を負うて戰はゞ必ず壓ひ踏まんのみ」（壓倒的勝利）であると說き、「神軍の秘義」（神のみいくさの、おくの手）であるとも云つて、聖戰の信念に生きた拂曉戰の重要性を繰返して力說してゐますのは、何と卓見ではありませぬか。

【六】 次に地物の利用が　神武天皇樣に始る と云ふ事について申し上げます

はじめ日下の戰に、官軍の一兵士が、大きな樹にかくれて難を免れる事が出來ましたので、其の樹を指して「恩母の如し」と云ひました。母の古語はおもと云ひましたから、左樣に感謝したのであります。それで、時の

人は其の地を名づけて「母の木村」と云ひました。實に地物利用の巧な例であります。後世此の附近から楠公の參謀恩地左近が出ました。「恩地」とは「母の木」の訛だと云ひます。之も　神武天皇のみいつの後世に及ぼした感化の一つと申されませう。西鄕隆盛は恩地左近を詠んで「名分大義、間然する莫く、幾回か計を挫いて肝膽を寒からしむ」と申しました。

【七】 次に『楯祭り』の神事について申し上げます

日本書紀によりますと、皇軍が鋒を回して盾津で御乘船の時に「楯」を立て、雄詰びをしてゐます。「此の身體は此の楯と共に碎けむ」と云ふ、神に對する誓であります。天地にも通れと大音聲を揃へて神樣に誓つたのであります。スパルタの「楯に載せて歸れ、然らずんば楯に乘つて歸れ」と勵ました言と能く似てはゐますが、「楯よ能く戰つてくれた。之からも生死を共にしよう」と自ら振ひたつた皇軍の志氣の方が一段の凛々しさを感ずるのであります。後世、滅私奉公・義勇奉公　等の奉ると云ふ語が出來ました

が其の語源は、此の「楯祭り」の神事に發するのではありませすまいか。

【八】七生報國の信念の源について申します

五瀬命の最期の雄詰びは「賤しい奴のきずを負ひ、仇討も果さないで、死んでも死なれようか」と云ふ意味の事を仰せられました。此の「死しても止まない」といふ熱血は實に七生報國の信念の源ではありますまいか。

「斃れて後に止む」といふ孔子曾子の教は、さりながら、死しても止まない日本魂は、實に五瀬命から淫々として流れてゐるのであります。以て楠公兄弟の「七生報國」、新田義貞の「末葉までの奉公」、結城宗廣の「多生報國」、新田義興の「七生滅賊」となり、吉田松陰の「七生説」となり廣瀬中佐の「正氣歌」となつて竭きる時はないのであります。

「いやしき奴の手を負ひ、報いずて命すぎなむや報いずて命すぎなむや」

本居宣長が、五瀬命を祭り奉つた竈山神社を歌つた歌に

「男健の神代のみこゑ思ほえて嵐はげしき竈山の松」。

【九】次に貴き建國の犧牲—死して護國の鰐となり給ひし事を申し上げます

皇兄稲永命と御毛入野命とは壯年の頃海を航して大陸に活躍せられたのでありましたが、今や六十に近き御高齢を以て御東征を輔佐せられ、熊野灘で、暴風（土用浪）のために神去りまし／＼たのであります。その神去ります時、神武天皇の御恙きを祈りつゝ、劍を拔き雄詰び諸共、荒れ狂ふ浪の穗を踏んで海底に突入せられたのであります。死してさひもちの神とおなりになりました。さひもちとは谷川先生の研究によれば鰐の事であります。死して護國の鰐と化し給うたのであります。まことに畏き極みであります。われ／＼は徒らに二千六百年の祝勝に醉うて有頂天になることなく、三皇兄の殉難を回顧し粉骨碎身の誠を輸さねばなりませぬ。

みつるぎを怒れる浪にぬき放ち
今もきこゆる男詰びのこゑ

【十】 次に熊野迂回の戰略と紀南健兒の從軍とについて申し上げます

熊野迂回の戰略は、素盞嗚尊及び御子三人の經營せられた植林造船の盛であつた熊野の勇士を奮起せしめられたもので、實に雄大なる戰略であります。丹敷戸畔と云ふ一女酋は叛きましたけれども、ほに一部分の事で大部分は忠誠を擢んぢて、減少した皇軍を增强致しました。又實際に從軍致しました首領に高倉下と八咫烏とがあります。高倉下は海岸に勢力を持つてゐた忠臣で、饒速日命の先妻の子であります。八咫烏は神產靈神の御子孫であつて、民族東方發展の魁として御東征の準備のために來り「北山に住み川上に遊ぶ」山地に精通した義烈の士であります。正に高倉下といふ海幸彥と八咫烏といふ山幸彥との從軍であります。何と渾然たる海陸共同策戰でありませぬか、又無名の勇士の多く參加致しました事は（按ずるに長髓彥の根據附近には紀伊・志摩の地名が十四もあるのであります。矢田は

八咫烏の奮戰の地でありませうか。西城・木ノ島・湯谷・押熊・熊凝・垣內等、紀南健兒の從軍して奮戰致しましたのを想像し得るのであります。）

◎彌生式土器の初期のものの一種に遠賀川式があります。そして遠賀川式土器は北九州は勿論南九州と伊勢海沿岸に多いのであります。（後藤守一神武天皇時代の考古學による）。以て伊勢には御東征以前に、猿田彥神、五十猛神、手置帆負神、饒速日神の先妻の子高倉下、神產靈神の御子孫の八咫烏等が、來て居られたことも想像せられます。故に　神武天皇樣の熊野迂回の戰略は頗る意義のあるものである事を、今更敬仰申し上げる次第であります。

◎伊勢海沿岸の銅鏃は、大陸のものに比して、全く獨自的のものであります（後藤守一）。當年の三重縣人が精鋭の武器を執つて從軍し、日下阪の戰と漂着との爲に激減した兵力增强の任をお勤め申し上げたのも想像致されますのであります。

【十一】 次に必勝の信念について申し上げます

海幸彦高倉下の奉りました寶劍の名を韴靈と申します。ふつとは截ち斬る音であります。人觸るれば人を斬り、馬觸るれば馬を斬り、受ける太刀があれば其の太刀もぶち切るのであります。又どんな堅いものでも突き通しますからさしふつの劍とも申します(古事記)。以て必勝の信念と突擊の魂とが日本刀にこもつてゐますのも、歴史の極めて悠久なるものがある事がわかります。

又　神武天皇の御名を磐余彦命と申します。いはれとは磐と云ふ字と余と云ふ字とを宛てゝゐます。岩石は自分である。岩石の如くに動かないと云ふ剛健の御德を仰ぎ奉る事が出來ます。又いはれは古語に集ると云ふ意味がありますから、剛健の御德の一面に萬民を父母とする御慈愛の御德を備へてゐられましたのであります。敵に對しては岩石の如くにつゝ立ち味方に對しては親の如くに愛し給ふ　神武天皇の聖德は、實に皇軍必勝の信念の生るゝ所であります。(五十三頁、八十四頁參看)(1)滿むノ訛(日本書紀三)

【十二】　次に　神武天皇樣の遊ばされた敵情偵察について申し上げます

先に海の嚮導をなした椎根津彦は蓑笠を被つておぢいさんの姿となり、近頃歸順致しました弟猾は箕をかぶつて狂婆の姿となつて、敵軍の中をとほり、敵の背面の天香具山方面まで偵察して復命詳に申し上げました。

海行きて導びくのみか陸行きしいさほも高し天のかく山　(松平忠敏)

又、紀南健兒の大先輩八咫烏も偵察に勸降に大いに勉めまして、敵の本營の木に止まつて『かあ〳〵いざわ〳〵』と鳴いた事もありました。

八咫烏の詩を吟じます

人乎鳥乎八咫烏、深山嚮導大躰軀。烏乎人乎八咫烏、軍令啞々庭樹呼。
嗚呼大日本神國矣。禽鳥勵人輔皇謨。

【十三】　次に『汝の敵を愛せよ』の御實行について申し上げます

八咫烏の案内で兄猾を誅せられましたけれども、昔から其の土地を領して

ゐたものでありましたから、其の部下をお諭しになつて順逆の理をわきまへしめ、宇迦神社を建てゝ兄猾を祭る事をお許しになりました。先には海路の祟をなした章魚を祭る事をお許しになつたり、誅に伏した名草戸畔をも祭るのをお許しになりました。又伊勢には伊勢津彦が居て皇師天日鷲命に手向ひましたけれども、歸順致しましたので、その神の名を採つて國の名をいせとおつけになりました。實にキリストの言ふ「汝の敵を愛せよ」との金言をキリストより六百六十年も以前に幾回となく御實行になりました。キリストは言葉だけでありますが、　神武天皇は幾度か重なる御實行であります。東洋の聖人と西洋の聖人と、其の四海後世を感化する仁愛は一致してゐますが、其の眞價の甲乙は言はずして明々白々であります。

御即位の後、論功行賞を遊ばされました時、歸順した大將のあとつぎ（饒速日命の子美眞子命）を近衞師團長に任ぜられ、其の子孫も亦感激して忠誠を竭しましたのも、此の廣大無邊にして深淵無量なる御仁德による事は、賴山陽が「日本政記」に於て「まごころを人の腹の中へおしこんで、感動

せしめずにはおかないものではないか」と論じてゐます。

【十四】　次に大敵を怖れず小敵を侮らざるお諭しについて申し上げます

連戰連勝の皇軍に對し　神武天皇は「戰勝ちて驕る事なきはよきいくさのきみのわざなり」と、軍隊の幹部を御戒めになりました。これ實に軍人勅諭の「小敵たりとも侮らず大敵たりとも懼れず」との大御言葉と、二千六百餘年を隔てゝ相通ずるもののあるを拜し奉ります。

【十五】　次に『陛下の軍人』といふ信念の確立について申し上げます

神武天皇は一兵卒に對しても吾が子として、大切に取扱はれました事につき、谷川先生の研究を申上ます。吾が子といふ古語はあごであります。神武天皇の御製に、「吾子よ／＼、したゞみの、いはひもとほり、うちてしやまむ。」

又、「今はよ〳〵、あゝしやを、今だにも、吾子よ〳〵」といふのがあります。之は所謂久米歌で、御大典に歌ひます。實に軍歌の祖先であります。實に大日本帝國の軍歌は、　陛下が兵卒を「吾が子」として、大切にして下さつた御製から始まつてゐるのであります。

神武天皇のみならず代々の　天皇も　神武天皇の御心を以て御心とし給ふ事は、御卽位の大典に當り、久米歌の舞樂を天覽遊ばされる事からでもわかります。たゞに　天皇のみならず、　皇后も軍人を吾が子としていたはつて下さいましたので、谷川先生は　光明皇后が遣唐使をお送りになります時、「吾子よ」とお詠みになつた事を併せ記してゐます。

「大船に眞梶繁ぬき此の吾子を唐國へやる齋へ神たち」（萬葉集卷十九）

あゝ一遣唐使の船出を吾が子の渡海と見なして天地の神樣に御守護を祈り給うたのであります。

「私は　天皇陛下の軍人であります」といふ信念の由來する所、眞に悠遠と申さねばなりませぬ。又歷代の　皇后のみならず、皇太后も臣民を吾子

とお呼び下さいましたのは神功紀に記してあります。

【十六】　次に散開と密集とに就いて申し上げます

今申しました御製の「しだみの〳〵、いはひもとほり討ちてし止まむ」の細螺はさゝがひとも云ひまして小さい卷貝であります。或時はばら〳〵になつたり或時は群がつたりして岩石を圍んでゐます。その細螺の如くに、或時は散開し或時は密集して、ねんばりにねんばつて進軍し必勝せねばならないとの御製であります。

神風の伊勢の海の大石にや延はひもとへる細螺の〳〵、吾子よ〳〵、細螺の、い這ひもとほり、討ちてし止まむうちてしやまむ。

寡を以て衆を討ち、よく之を包圍撃滅せられました　神武天皇の神智神勇は實に萬邦無比であります。

【十七】　次にだまされた風をして敵をだます

御計略について申し上げます

賊軍は遠く〳〵北方の高地に火を焚いて多くの軍隊の居る様に見せかけ、實際は近く〳〵西北に中堅部隊を配置してゐます。それは皇軍が北方を攻めると、中堅部隊が出て來て皇軍の背面を討つ計略であります。皇軍をおびきよせて挾み討ちにする計略であります。時は舊暦十一月の極寒の空であります。

天皇は敵情をよく御承知でありますから、皇軍の弱い部隊をして西北の強敵と戰を交へて要害の地におびきよせしめられました。そして一方では中堅部隊を以て北方の墨坂を占領して焚火して身體を十分に暖ため、急に西北の忍坂へ迫りました。忍坂の强敵は皇軍の弱い部隊が皇軍の全部だと誤信して追擊してゐますので、忍坂の根據地は手薄であるのを急襲によつて占領せられ、敵の中堅部隊は進退谷まつて全滅致しました。

【十八】 次に金色の鵄の戰略的意義について申し上げます

神武天皇は五十歳の高齢を以て浮足たつた敵を急襲し最先に立つて中央突破二十五里。今日の大和の西北の富雄村の白庭へと進軍なさいました。そ

して南北に流れてゐる富雄川の東岸に皇軍の先鋒は進み、西岸には山脈を後にして敵の大軍が控えてゐます。敵は待ち受けてゐた大軍、味方は中央突破二十五里の疲れた部隊であります。故に日本書紀に「十二月四日、皇師遂に長髓彥を擊ちて頻に戰へども勝つ事能はず」と記してゐますのは、正に此の時の苦戰を書き現はしたのでありませう。

皇軍の後續部隊は次第に到着致します。　神武天皇は富雄川の東方の丘陵の一角百八十米の高地鵄山にお立ちになつて指揮をお取りになつてゐます。その下流では皇軍は敵前渡河し、上流では山岳を攀ぢて敵の背面を突きました。此の宇治川の渡河と鵶越の坂落しとを同時に用ひた樣な善戰振により敵は總崩れとなりました。（弘田正郎先生の上古史談を參考とす）

さて此の地では鵄を神樣として崇めてゐましたのに、鵄が　神武天皇の弓弭の先に止まりました。長髓彥の部下皆歎息して曰く「神は吾等を見すて丶　神武天皇に從ひまつれり」と。天は萬年に一度見る聖戰中の聖戰を淨むべく氷雨を降らしてゐます。谷川先生の先生である玉木葦齋曰く「我が

軍の上にしよぼ〳〵雨が霑ほふとか烏が集ると勝利確實である」と。

【十九】 次に細戈千足國の名稱について申し上げます

精巧な武器を古語で細戈と云ひ澤山あるといふのを古語で千足と申します。細戈千足國とは日本の異名の一つであります。日本は、單に日本魂だけが世界無比であつたのではありませぬ。日本刀の鋭利な事は世界無比、日本弓は支那弓の倍以上の大きさであります。長刀や柔道は支那では殆んど發達致しませんでしたが、日本へ入つて大いに發達したのであります。科學兵器を競ふ世界の大勢に於て、細戈千足の大御言の意味深遠なるを痛感する次第であります。日本書紀に曰く「昔伊弉諾尊、此の國を目けて曰く、日本は浦安國、細戈千足國、磯輪上秀督國」と、これ神武紀三十年の記事であります。「くわしほこ千足のみいつ末つひに仰がざらめや國の八十國」とは、三條實美が此の心持を歌つたのであります。

【二十】 次に戰後の經營について申し上げます

神武天皇の戰後の經營は、聖戰よりも遙かに廣く行はれました。八咫烏は山城に皇威を開拓し、高倉下は越後に赴いて漁業・農業・植林を敎へ、天日鷲命が伊勢の北方まで懷けました。聖戰は近畿の一部に止まりましたが、戰後の經營はその幾倍廣く行はれたかわかりませぬ。この點も興亞の聖戰には大いに學ぶべき事であります。

【二十一】 次に八紘一宇の詔について申し上げます

古事記によりますと日本歷史は、天御中主神に始まつてゐます。天御中主とは天地の中心を主宰する意であります。實に我が皇室は世界の中心であります。八紘一宇の中心であります。

日本書紀によりますと日本歷史は國常立神に始まつてゐます。國常立とは國とこしへに立つ、天壤無窮の意であります。

神武天皇の御東征は實に時間的に無限な天壤無窮の神勅の强化であり、空間的に無限な八紘一宇の皇道の宣布でありました。（五十九頁十一、十二行參看）

◎瓊々杵尊の御降臨は第一回の天降りであります。

神武天皇の御東征は第二回の天降りであります。明治維新は第三回の天降りであります。而して今や第四回の天降りがアジャに向つて行はれんとしてゐるのであります。（六十三頁參看）

天津風吹けよあじやの大空に神武を偲ぶ年はめぐりぬ

（二千六百年即昭和十五年紀元節前夜名古屋放送局よりの原稿による）

いはれ
- 磐（巖）
  - 磐る（名詞が動詞になつた）新講飯田季治
  - 磐余（いはわれ）の約（岩石はわれなり）、無敵皇威 ―― 重暉
- いはふの轉訛
  - 齋（いは）ふ（神と一なり）……
  - 磐境（いはさか）磐座（いはくら）…… ―― 養正
  - 祝ふ（積善餘慶）……
- 滿（いは）（集）むの轉訛（日本書紀三）―仁德無比……
- いは（いへ）（家の古語）る（名詞が動詞になつた）四海一家 ―― 積慶

（附）谷川士清先生小傳

家風と感化

谷川士清先生は今から二百三十年ばかり前、東山天皇の寶永六年（二三六八）五代將軍綱吉の他界した年の二月二十六日に今の津市新町八町四丁目に生れ、百六十年ばかり前の安永五年（二四三六）十月十日に亡くなられた人であります。その神道とその國學とその歴史とは、永く神彩奕々として皇運を扶翼するものがあります。

先生の家系は詳でなく、數代前から醫を業としてゐました。その父義章は京に出でゝ醫を福井丹羽守に學び、勉學の餘暇に淺見絅齋の尊皇論者と交り、特に小野鶴山と親交がありました。小野鶴山は、逸話に富む和魂漢才の士でありました。父義章は滋賀縣高島郡を中心とする望楠軒同人の一人として楠公崇拜團に加盟し、北は若狹から南は紀州に至るまで同志と文通がありました。楠公を崇拜して國難の魁に散るのを無上の光榮とする純情

と、和魂漢才の態度と共に仁術を以て自ら任ずる醫業とは、嫡子士清に及ぼした感化がどうして少いでありませうか。

そして又、菩提寺である福藏寺の住職の惟然浩天上人は『皇帝陛下萬々歳』の祈を、幕政極盛の時に、朝夕念じてゐた事も併せ考へねばなりませぬ。谷川士清先生の十二歳の時に、浩天上人の忠誠に就いて降された叡感の綸旨は當寺に寶物として傳へてゐます。

遊學

先生は享保十五年二十二歳で京に出て醫を福井丹羽守に學ぶの傍、神道を研究し武道に勤しみました。谷川氏は代々福井家に學んでゐたのであります。その當時の儉素な勉强振の逸話と筆記の詳細丁寧さとは、今日見聞して襟を正さしめるものが多々あります。

當時の神道は氣力が無いのを慨いて「神道學則日本魂」を著はして、「本當の日本人としての眞心（直日靈）の著はれないのを憤つた國士的神道家である松岡仲良に就いて文武兩道を學びました。—（正に本居宣長い直毘

に先だつこと四十六年）—

丁度其の頃同じく松岡氏の門下に越後から來てゐた十七八の苦學の青年竹内宗詮（式部）と云ふ者があつて、其の頃は羞庵（しうあん）と號してゐました。羞庵と號しますのは、易に「其の徳を恒にせずば之に恥を羞（す）むるあり」。（不恒其徳、或羞之恥）とあるに本づいたのであります。先生自身も恒徳堂と號し、同袍互に廉恥を以て相戒めて勉勵致しました。

二人共松岡先生に始終ほめられて「もう私の知つてゐる事は皆教へてしまつたから、私の先生の玉木兵庫に紹介する故に、よく勉强し、死して惜まるゝ人となれ」と云つて推薦してもらひました。時に享保十七年、先生二十四歳の春でありました。

玉木先生は京都岡崎の人で、葦原の學從（海國日本の學生）を以て自ら任じ、葦齋と號しました。又其の師の山崎闇齋以上に楠公を崇拜して兵庫と號しました。そして其の兵學は「橘家神軍」と稱して、自ら一派を成してゐました。谷山先生は、當時嘿々居と號して、一意專心文武に勵精致しま

した。彼の雄偉な躰格は蓋し當年鍛錬の賜でありませう。竹内式部の、彈き丸、放矢を攫むに妙を得たのと、谷川先生の强弓振は門人間のほめものであつたと云ひます。

歸　鄉

享保二十年、先生の二十七の八月、學成りて鄉に歸られました。其の時、玉木先生は、自作の鳴弦弓矢を授與致しました。それは高產靈神の朝敵退治に用ひられた天の羽々矢と天の鹿兒弓の故事に則つたもので、弓道皆傳の免許狀であります。天つ神に代つて朝敵を討つ使命の宿つてゐますことは、先生の著作（通證卷六）に明記してゐます。

開業と恩師追慕

さて一方、本職の醫の方は譽遠近に籠しく、特に產婦人科に非凡の手腕があつて、狸までが治療を請うたと云ふ傳說があり、藥匙も磨り減りました。翌元文元年七月八日、恩師玉木正英先生歿せられ、先生悵恨して遺著

の上梓に志し、大に改訂增補、面目を一新し、元文四年春四月吉日、玉木先生の名で櫻の版木を以て印行致しました。その裝幀は六角の中に十二瓣の菊の模樣を百十四組んであるのを並べ、以て六合を宇とする皇軍の彌榮を祈りました。書名は「藻塩草神代卷」「藻塩草神武紀」と申しました。時に百十四代櫻町天皇の御代であります。延享二年十月、家重に九代將軍宣下があつて、尊幕の空氣は濃厚を加へました。先生慨然として詠ずらく

いかでこのくに〻生れて神の道ふみもかよはぬ人しやはある

以て其の義憤を見ることが出來ます。

日本書紀通證と倭訓栞

寶曆元年十二月、日本書紀通證三十五卷成り、山崎闇齋以來の史學を集成して、爛々たる眸を點じたものであります。第一冊に國民道德概論等が十九則並べ記してあります。然し眞の大研究は、第二冊から第八冊までにあります。國史の第一頁第一行目から神勅の御精神は輝いてゐる事を述べてゐます。神勅は天照大神の大御言葉でありますけれども、之は天照大神の御

德の表現として自然に溢れ出たのであります。天照大神のみならず代々の神々の御德の表現として自然に溢れ出たのであります。代々の神々の御德のみならず國史の始に現はれ給うた國常立神の御德が自然に溢れ出たものである事を詳に考證してゐます。（本書は主として先生の研究を骨子とす）

次に學者として志士としての先生を代表する者に、通證と並べて倭訓栞がありまし。之は通證の原稿完成後、間も無く着手し畢生の努力に成つたもので、五十音順による辞書の祖であります。そして語源と國民風俗、國民道德との關係を探究し、語に文語口語の別ある事、活用のある事等を創唱し、蘭語、西班牙語、蝦夷語、琉球語にも材料を採つてゐます。特に注意すべきは、古語方言等の語源を研究し、以て古道を明にし、日本語發生と同時に神勅を奉戴する精神が躍動してゐた事を說いてゐるのであります。たとへばかみときみとくにとは語源が一であつて敬神尊皇愛國の一如であつた事を偲ばせます。皇居も神宮もみかどと云ひ、神宮も御所もみやと云ふ所から推して考へますと、　今上天皇陛下卽是　天照大神の信念は日本

人の舌の出來た始から溢れてゐたのであります。こんな事が到る處に說いてありますが、平泉博士の言の如く「熟讀せざる時は一見奇怪のやうで」あります。熟讀すれば實に當然な正論であります。

其の他の著書

和訓栞の出版は、其の前編は孫士行に至つて出版を完了し、中編後編は、諸弟子の子孫相傳へて盡力致しましたが、二回の飢饉のために中絕致しました。漸くにして明治二十年七月に出版を完了致しました。實に谷川家三代諸弟子百二十餘年の努力に成るもので、其の間に幾多の苦心を傳へてゐます。正に鐵眼の一切經出版に比すべき點があります。

先生の著には、此の他に歌集「惠露草」があつて、四十四歲から四十七歲までの作品四百四十首を集めてゐます。其の他考古學の先鞭たる「勾玉考」を始として、洗心居集、鋸屑譚、八百會草、校本日本書紀、書入萬葉集、讀大日本史私記等があります。

惠露草の名は、先のみかど櫻町天皇の寬保三年八月十六日懷舊の御製の

たらちねの惠の露のふりし世をしのぶ涙は袖に落ちつゝ

から採り奉つたと傳へてゐます。

勾玉考は考古學の研究として以外に、玉の精神的意義を說いてゐます。支那の玉は個別的で一つ〳〵を珍重がるけれども、日本の玉は五百箇御統珠であつて緒に貫いてある總合の玉である。支那、西域歐米の玉は個人的意義をつけて貴んでゐるが、日本の玉は國家的意味のみを持つてゐる事を說いてゐるのは卓見であります。

洗心居集は小研究の雜纂で、人丸の二十八人ある事を擧げてゐます等は、林道春が德川家康の前で人麿に四人ありと云つて冷泉爲滿を顏色なからしめた逸話以上の逸話で、先生のまけじ魂を見ることが出來ます。

疑問の屋敷

さて竹內式部との親交は一生變らず、式部が幕府のために京都を放逐せらるゝや伊勢に放浪すること九年、此の間先生は絕えず式部を慰勵し、自宅

及び女婿荒木田尙賢（蓬萊甄形）と其の弟子鵜飼又大夫との宅にかくまつてやり、巧に志士と會合させました。今日先生の舊宅を訪れますと、匿し井戸三つ、忍び天井一つ、狸の間一つがありまして、當年を思ひ浮べしめるものがあります。

賴氏と唐崎氏

門下生は九州、北越、東北等から集まりました。中でも賴又十郎と唐崎常陸介とは有名であります。又十郎は山陽の祖父で、山陽の二つの時に、忠孝の二皮文字を書いて其のお守袋の中に納めました。山陽は一生此のお守袋を離しませんでした。常陸介は、文天祥の忠孝の字よりもまだ大きい忠孝の字を氏神さまの千引石に刻みました。その竹原の反古冢と高山彥九郎の跡を追つて割腹したのとは有名な話であります。

反古塚

さて光陰矢の如く安永四年となり先生は六十七の春を迎へました。「本居

神社の傍に反古塚を建てゝ、自分がこれまでかゝつて作つた日本書紀通證倭訓栞、勾玉考の草稿を埋め」（倭訓栞たまむし）ました。實に埋めたのは反古でなくして皇國の寶であります。然らば何故にほぐと云つたかと云ひますと、倭訓栞に三つの意味がある事が記してあります。

第一、己が身を反古にして大君に捧げまつる。一身を犧牲にして君國に報いると云ふのであります。第二、呪ふといふ字も「ほぐ」と讀みます。幕政を呪ふのであり。第三、祝ぐであります。壽くであります。朝廷を壽くのであります。

然し表面では一生の力作が成つたから、記念として石櫃を造り、其の中に書を藏めた。友人よ門人よ、歌なり文なり詩なりを作つてくれと云つて、祝賀の作品を募りました。祝賀の歌文はその年の暮まで絶えず集まりました。反古冢の表には「反古冢」の三字が大書してあり、裏面の文字は有名な

何故爾碎伎志身曾登人問婆其禮等答牟日本玉之譬

であります。大分磨滅し

てゐます。頂上には磨滅の中にも「雲上の菊」の滿開と菊水の流四すぢを認める事が出來ます。以て皇代をことほぐために楠公四百四十年を記念するために建てたのであります事が更に明になります。

そしてこの歌は本居宣長の「大和心」の歌に先だつこと十五年三ヶ月であります。

日本魂

當時の日本魂や大和心を說くものは、排他的のものが多くありましたが、先生は和魂漢才は勿論、印度、歐米の長所をも學ばんとするのでありました。又世間では日本魂とは武家時代に發達したので「源氏物語」の乙女の卷に

猶さえをもととしてこそやまとたましひの世にもちひらるゝかたもつようはべらめ

と出てゐるのが始であると云ひますが、先生の研究によりますと、日本魂には四十三種もあつて、肇國の始から活動してゐるのであります。天御中

主神を輔佐し奉りまゝたのは、高皇産靈神皇産靈と云ふ神様であります。高く神々しいむすびの魂を以て、天の御中主即天地の中心即八紘一宇の中心たる皇室の羽翼（先生の用語）となつたのに始まつてゐます。むすびとは生命創造の魂、結び合す魂等の意があつて、先生の意を推せば、世界無比の發明發見の叡智であり一億一心の團結心であります。畏くも神武天皇以來、宮中に於て祀らるゝ八柱の神々の中で、六柱までが産靈魂にゆかりのある神様であります（神武紀通証）。世界無比の科學と世界無比の道徳とを以て世界に君臨すべき日本の大使命は實に肇國の始から活躍してゐるのであります。

疑問の死

口碑によりますと先生の亡くなられる前年に其の子士逸と共同して書を著はし（書名未詳）當局から非常な彈壓に遭ひ、先生は老年の故を以て著述差止の罰に止まりしも、士逸は故郷を放逐せられたので母の里なる安西村

多聞に不遇の生涯を終つたと申します。

今日、谷川家代々の菩提寺たる福藏寺の墓前に跪きますと、先生の碑が一番入口の場末に置かれ、石も粗惡であります。先生は菩提寺たる福藏寺復興に與つて力ありしと聞くに係らず、こんなみすぼらしい碑であるとは當局への遠慮でありませう。反古冢の建つた時には祝文、祝歌の山をなしたにかゝはらず、先生の歿するや弔詩なく弔文なく寂々たる荒山の石徑に大仙の逝きしが如く記錄の何者もありません。筆まめな本居宣長も唯だ日記に安永五年十月「十日今日津谷川淡齋死之由聞之六十八歳」と記しただけでありました。

又、墓所に士逸の碑がありませぬ。傳ふる所によりますと、安西村多聞（今日は多門と書く）の西運寺に士逸をその母が弔つたと稱する經石があります。（そも〳〵多門は谷川先生の夫人及び孫士行の後妻の生地であります。）今日西運寺に詣でますと感懷無限なるものがあります。經石の碑文に曰く

とことはに御法の聲の響野の誓に誰ももれじとぞきく　（眞子）

と記してあります。

とことはにの五字の中にことはや（士逸）を綟ってことはにと誦み込んでゐます。士逸よ汝は早逝したけれども、御法（佛敎）の聲の響く所は必ず救ふと云ふ佛の誓願に誰も漏れないから、お前も安樂往生出來るぞ、と詠んだのでありませう。

それにしても語路の妨となるのはひびきのといふ語であります。椋本の三昧をひびきのと云ひますけれども西運寺に關係がありませぬ。按ずるにひゞきなだ。ひゞきのさと（倭訓栞）の語の如く山彥の如く聲の反響する平地を云ふのでは無からうか。そして此の語に重大な意味がこもつてゐるのでなからうか。父子協力した尊皇興國の誓願は反響に反響を重ねて全國民に漏れ無く響き渡る時があるだらうとの、英靈に對する慰藉激勵の心が溢れてゐるのでありますまいか。

士逸先生は芙蓉と號して尊皇の高節自ら持すと雖も、西運寺の山より鄕里

を遠望して「父上いかに」の感無き能はず「鳳」とも號して空を飛んでも安否を伺ひたいと云ふ「親に對する至情」を寓してゐました。

楠公四百四十年、　慷慨歌塚丹心紅。
唯稱書成埋反古、　偏願殺身揚皇風。
極盛覇業從此傾、　弔鐘寂々錦帳中。
旭光照天豈一國、　長江恒河道融々。
天壤無窮、八紘一。　日本魂護日東。

――『谷川士清先生の日本魂』は（「日本人」に六回に亙り連載）――

日本魂による論語解釋

東光　伊藤太郎著

學而第一（人生は辨證の旅なり）
爲政第二（天躰は君ケ代を合唱す）
八佾第三（支那の清麿公）
里仁第四（楠公論語）

◇論語は一大思想体系なり
◇論語は全部押韻なり

◎論語の徹底せる科學的分析の完成
◎論語の俳句・短歌による對照
◎以下は目下謄寫にて印刷中、六十部限定
（紙代雜費一圓半）
◎日本魂の權化谷川士清先生（絶版）（八十錢）
—右『增訂版』近く出版の豫定—

和紙和裝各冊百五十八頁ヨリ百九十頁迄
定價第一ハ壹圓貳拾錢　他ハ壹圓六拾錢
送料　各冊　金拾四錢

ムケイ社發賣

409
546

昭和十五年十二月二十五日　印刷
昭和十六年一月一日　發行

定價　金六拾錢

著者　伊藤太郎

三重縣津市外納所九五八番地
發行者　寺一研造

三重縣津市櫻ヶ岡町四番地
印刷者　山路庄五郎

發行所　三重縣津市外納所九五八番　ムケイ社　振替口座大阪七七三七三番

大賣捌所　大阪市西區阿波堀通四丁目二〇　株式會社　大阪寶文館　振替口座大阪四三番

終